

希望回復への道程

—フレデリック・ゴダード・タッカーマンの世界—

森田 孟

本稿は本邦初の試みとして、モマディ編の『フレデリック・ゴダード・タッカーマン全詩集』（後出の「訳注・註解」の参照文献）を定本に、十九世紀中葉のアメリカはニューアイングランドの生んだ孤高の詩人の全ソネット作品とその終章とも目される長篇詩「コオロギ」の全訳を提示し、その世界に光を当てようとしたものである。

目次

第一部

一 ソネット第一集	一八五四一一八六〇（一一二十八）	2
二 ソネット第二集	一八五四一一八六〇（一一三十七）	
三 ソネット第三集	一八六〇一一八七二（一一十五）	
四 ソネット第四集	一八六〇一一八七二（一一十）	
五 ソネット第五集	一八六〇一一八七二（一一十六）	
六 「コオロギ」 I—V		
93 79 71 58 26 2		

七 既刊ソネット五篇

訳注・註解

第一部

フレデリック・ゴダード・タッカーマン (Frederick Goddard Tuckerman, 1821-73) の世界

略年譜

あとがき

133 131 122 104 100

第一部分

— ハネツメ第I集 (Sonnets: First Series 1854-1860)

—

時折り、小川や木陰の側そばをゆづくり曲がりくねつて歩く
なすこともなく草を踏みしめながら——何の役に立つのかと
私は訊ねてみると、「こんな艶な物想いが、心配や怖れが、

たとえ私が堤提⁽²⁾という堤から花を——赤根草(1)、王様蘭

はたまた薄青いツメクサを——引き抜いては

考え考え涙を催しながら自作の詩に嵌め込んでみても 何だ? というのか。

自らの死を歌い、思いを凝らし悼むのに、湿った庭の小道で
秋風が枯れた草花を嘆き悲しむ時のような

詩が生れる息遣いをしてみても
 それがどれ程の値打ちがあるだろうか。何の役に立つか
 白鳥の声といえども誰もが聞き損うのなら。
 あるいはその雄飛の姿も。混り合つてゆく青色の中で
 誰からの注目も浴びないのなら。それでもそんなに甘えていると
 神は神ではなくなつてしまいそうだ、神とは 知つても知ることにはならないものなのだから。

二

それ故、こういう信念を刃のように保ちながら
 自らの力と意図を静かにゆっくり集中させながら
 その信念を冷静な一撃のうちにあの暗い疑いの
 中心へ持ち込もうと心に決めて私は待ち、
 気落ちすることなく警戒するし
 〈妨害する人〉の怒り、武力、業^{わざ}を恐れもしない、
 彼が、私に出来た弱点を新たな武器にして
 私自身に私を驅り立てさせ攻撃を押し進め
 始めるのを 近くの隠れ処から見ても
 私はそつ気なく打ちかかり静かにやり返し続ける、
 彼は激怒するが。それからその恥辱から

彼は、その競り合いに勝った者たちが顔という顔を
月桂冠で飾り立てて鎮座する所を指示して
私の気分を更に沈ませる、というのも、立場を低く落されるので、

三

それで彼らの考えに揉まれているうちに 私の限りなく誇らしい考え方さえ
露になるようだ、せいぜいでもほんやりとだが、不滅の
星々の間の不毛の輝きだ、東の間だけ幽かに
荒涼たる北方に明滅する北極光のようだ、

汝が夢みているのは何なのか、見込みの不確かな価値か
差し迫った重要さなのか、それとも汝は思うのか

自らの生活はますますなので 前以つてそう

述べたてようかと。あるいは汝は悲嘆のうちに賢くなつて
実り多き悲しみにその翼で自らを一掃させてしまつたのか？

今日 私は 甘美な声が植林地の小径で

歌つてゐるのを聞いた、笑いと氣取らぬ叫びを挙げて
幸せな仲間たちを導いていた、離れて私は歩みを進めた
そしてその笑いと歌が軽やかに通り過ぎてゆく間

野の茂みの中に座り込んで 泣いたのだった。

四

それなのに見てもくれないのだ、私の青年期後半の、私には余りに露な
あの過去の生活も、私が彷徨い続けながらではあつたが
無邪気に優雅に触れてきた道も、ぶんぶん喰る蜜蜂は

カエデの丸太の上を　白重ねのサクラの木の上を

終日四月の青空を陽を浴びて歌い舞つていながら。

それでも辛うじて今は　一条の光を〈前衛〉は示さ

なければならぬのだ、悲しみが留まり、安らぎが始まる所に、

尤も私が足許を点検しながら怒りに驅られて歩くのは

罪の日々や　暗闇で罪惡がつけた

もつと濃い影の中をではない。恐る恐る歩いてゆくのは

実際には行なつていなくても免れたわけではない罪の真中をなのだ、

それが私を束縛し　足許を乱すのだ、

シロバナ洋種朝鮮朝顔の紫の毒花が

どんよりした麻痺を吹きかけて誘い　龍の翼を震わせるように。

五

そしてその陽は昏れ、地平線が 消えゆく
太陽を引いてゆき 我々は悲しみに打たれて
安堵の港も見い出せぬまま

道から大きく逸れて戻るも立ち止るもままならず
涙を流して見てはいるのだ 光輝がすみやかに薄れゆくさまを、
それでいてそれに殆ど注意を払わないでいる、それでも共有する人はいる
赤い夕映えの名残りを、注目するしばしの時を、
日没と闇との間の空間の幾らかを。

しかしそのような黄金の静寂が持続しない人もいる、
彼には 日が酔(さわや)て栄光が辺りを払つてはいる間にも

薄暗い大草原がはつきりと塩で灰白色になり
マツバハルシャギク(一)で灰色になつてゆきながら一日が過ぎてゆくのが見えるし、
穹窿が黒くなるのが見え、暗い風が流れ出るのを感じ、
乾いた雷が轟くのが聞えて、雨の降らないことが分るのだ。

六

彼にとつては、だが、時折のことではない、全体に注意を払い

その〈広大さ〉の中に自らの年譜を読んで
受け継いだ遺産のやつかいな諸条件を

調停し、満足させ、緩和させようと骨折りながら

天使を目的地で永遠に待ち続けるのだから。

すると病いも賢明な精神のための糧としかみえなくなり

悲しみは暗い装飾になる、

神聖な魂の雑草に 衣類になる。

でも、ここで私が、見張り灯の闪光を数に入れたらどうなる—
しかし無駄だ、おお無益だ、こんな風に光を求めてみても
無駄なのだ、闇を引き裂こうとして手探りしても—

私は 夜中に縋れこみながら 風と

声々の混じる夜に呼びかける、しかし吹きすさぶ風の轟きは
歎^{カク}だし、その水先案内の喝采もやつては来ない。

七

湿った沼沢地には ヒマラヤ杉が、びしょ濡れの
苔の這い回る木々で灰色になつたベイツガ⁽¹⁾の枝々が、
土の盛り上りには 赤色が擦り減つて白く褪せてしまつた
枯れ葉に埋つた黒いヤニマツ⁽²⁾が

雨の名残りが、腐った糞ホルが、

どうして汝らはこれほど私の心を捉えるのか、

昨日の光に、沈んだ日光の薄れたきらめきに

君の幅広の葉を幽かにでも通過させるわけでもないのに、

君の暗がりの中で競り合いから閉め出されて

涙のパンが生命のパンになるとでもいうのか、

一日のわめき声から遠く離れて、君の大枝の下で

新鮮な悲しみが静かに打ち続け、愛も誓いも

君の灰色の陰の中で緑になり、貴いものになるのか、

あらゆる美しい光や薔薇さえ遙かに及ばないほどに。

八

幅広い川などを下つてゆく時には

一日一日、でしやばつていた岸辺岸辺が

沈んでおぼろになつてゆくのが見えるようだ、大きな水流が

土手を押し広げ、海を求めて

長椅子状の松の木々、高い岩棚、露台を通つて

柳や低いスズカケノキの平地へと

沈み込んで、遂に波が見えると、そこではいすこも

九

その水流 자체がすっかり自らの水平線になるように、我々の初期の世界に属する部分は消えてゆく。静かにその周囲には 紫色の空気が垂れ籠めている、それでもそこに我々が秘密を読み取るようになると緑の岸辺のそばで 弾ねて渦巻く流れは膨らむのだ、山々は稀なる水蒸気へと溶けてゆき、生命だけが平らに露に旋回する。

それでも歩き続けていると 我々の若さを照らし出していた

深い光も認められなくなる、何年も経つて もはや若くはなくなつた

我々は静かに彷徨い、死者の墓の

間でつくづく考え方、突然陽が差したり曇つたりする

意味を探し求めるのだ、それでも 飛ぶように急いだり 大勢の

前を行く人々の後に従つたりして

石から星へと推論したり 安易に

このような存在を例証したりするのはよくないことでは? それとも私は――

偶然にか好んでか 私の足取りが進んでゆく所に、

といつても 途切れ途切れに分配されている幽かな光が見えなくとも

捉えなくても ゆっくりと敬意を払うので――

遂には光を浴びることになるのだろうか。それとも突然
はたとサウルのように^{じょごんに}跪いて 厳しかかる輝きを
腕で遮りながら ある声を聞くことになるのだろうか。

+

暗くなつた家の階上の部屋、

そこでは彼の足取りが成熟した大人の淵に達しないうちは
恐怖と苦痛が彼の呑み込まねばならない分け前だつたが、

私はそんなことはなかつたとも、いや確かにそうだつたとも思えないままに
幽かにその人のことだけを夢みている、

ところが今は 秋の雲がこれまでになく穏やかに通り過ぎてゆき
コオロギが戸口の踏み台の下で小声で言い立て

この季節にしては青々と草が茂つてゐる。

私は瞼を閉すことも眉を翳らすことも出来ないでいるのに
彼はそこに立つてゐる サツシの上つた窓の側に、

それで私は 気が遠くなつてゆく心持ちのまま考えるのだ
その黒いこけら板が傾斜していつて大枝に

それも屋根の上でこの上なく細やかに雪のようく粉々に砕けて

ナナカマドの小さな花弁に出逢うのはどこだらうかと。

十一

私は何の役に立つんだろう、ここで いのち 生命、日光、余暇が
許されても それで私がしかるべき活動へと
促がされるなり、我が身が前方への流れと融合するなり
できなくて、余りにも卑屈になつたり高慢になつたりするなら。
願わくは私自身、寄せては返す大衆の大波に揉まれたり

更に高く砂州へとうねる群衆が波のように
持ち上がる時に先頭の者と共に放り出されたり
大声で話すほど強かつたりしないことを。

しかしここに立ち止つて 私は、自らの悲しみを、
暗い家庭の苦惱を、出血してずきずき痛む傷を
みつめ 凝視めながら 静かに唇を閉ざして心の中で叫んだり
あるいは くる日もくる日も 冷たくひそひそ歩くのだ
夏の農場や野原の辺りを、流れや崖の傍らを
氣だるそうに そして 深く眠つて疲れ切つた人のように。

十二

丈高く堂々たる植物が 金色のフォークの花穂をつけて
斜面という斜面に群がつてゐる、私の心はその叫びを反復する、
力強さを求める叫びを、強力な勝利を求めて
激しく競う意志、大胆すぎる勇気を、

それがあつたら一度は 私は向き直つて実際に

尊大な雑草の一本一本を 土と同じ高さにしたことだろう。
しかし今、私は路傍を散策しながら 泣いたり

あの美しかつた日々を思つて溜め息をつく、当時意氣揚々たる
少年だった私は ビロードモウズイカの茎の間で

私自身が彼、あの〈獅子王⁽²⁾〉のようであることを希つていた、
そこでは彼の盾が矢を弾いていたし 彼の兜が

斧と剣で打たれて鐘のように鳴つていたが

彼はその戦⁽³⁾を後へと押し戻したのだ、國土につぐ國土は
彼の嵐のような手が振り回す剣にかかつて降伏したのだった。

異国の海辺を歩きながら涙を流し

十三

荒れた高潮線が砕けるのを聞いている人のように 私は
友人たちと離れて 惨めな気持でよそよそしく
だが 苦痛についてつくづく考へても 天空には何の兆^{モチ}も見つからない、
明りは異様だし、悲痛な声々が過ぎてゆく。
というわけでその悲運な水夫は 孤り死ぬがままにされながら
一日の終りに悲し氣に海の方を眺め、

離別する仲間たちの嘲りと蔑みを聞き、

はたまた故郷の露めく星々を妨げ歪ませる
靄を透かし見、獅子座の一等星レグルスが
どんよりした湿り気の中を熱くちかちか輝きながら
天狼星をぶるぶる痙攣させ激痛に苛むのを見るのだ
そのままはまるで 風の夜 波の谷間で苦闘する孤独な船の
帆柱の先に吊り下げられたランプのようだ。

十四

立場を誇るでもなく、並みはずれて豊富な
世俗の金銭に溺れず、不作法にはしゃぐことなく
穏やかで かなり寛大だった彼は
自らを賢明な指示で律した。

聖なる〈自然〉が彼の食卓を毎日展げてくれたので
彼は執拗にせがみ続ける疾風にも
責任を取りながら生きた、あの風の吹く青空で
揺れ押し流される長いハリエンジューの小枝のように。
彼は困難な事態から手を伸ばして 役立つ
価値のあるものを刈り取る力を欲しがつたりはしなかつたが
それでも私のこの友は 真夜中の僅かな時間に
自らへの忠誠を破つて 満足しながら涙を流すのだ、
愛を秘めた暖い眼、赤い唇、赤くはないが
ヒヤシンスの花のような薄いバラ色の頬のために。

十五

そして彼女は、美しくても冷たいなどとはおよそ感じさせず
緑の丘の頂（いたき）の若い山（オリアド）の精ではなかつたので
〈愛〉の懇願に幸せそうに従いながら
いにしえの神に頼るように彼に身を寄せた
その魂を根源の力にすっかり圧倒されて
彼の愛に愛の報いを返すのだ、あの胸へと
以前には殆どしなかつたのに 両腕を敢えて抜げて抱こうとするのへ

彼女はささやかな事として身を任せた。

それが今や 衝動は冷め 情熱は失せて
まだ終つていな年月を激しく悲しみながら

彼は彼女の両手に、口に、髪に、頭に口付けをして
これでもかこれでもかと抱き締めた。その
美しさの放つ芳香を呑み込もうとして、それから世間には
涙を流しながら自分の唇から聖体拝領の葡萄酒を与えた。

十六

それでも〈自然〉は、雷がその痕跡を

高いベイツガの木や砂岩の堤に留めていたりすると

色合いや激しい差異による衝撃の全てを憎んで
何か同意を示す色彩でその場所を癒してくれるか

その辺り一帯に自らの苔を引き回して湿らせ 緑にする。

そのように穏やかな〈時〉は優しい技を振るつて
別の日をもたらし、他の緑が 火に燃えて今や

空虚になつた死んだ土壤に接ぎ木される。

我々が保持してきたもの、持つてゐるもの、思い出を
沈めることの出来ないもの、そういうものから忍耐は生ずるのだ、

そこで今や彼は 離れて生きながら毎日涙ながらに
自らの愛の苦い灰を一番みするのだ
それでも貴重な豊かな、アグリアや
アルテミシア⁽²⁾が飲んだものよりも神聖なのを。

十七

人は皆、とその牧師は説く、如何なるものであれ何処⁽¹⁾からにしろ
その子孫はこの世を歩いてきたのであり

収穫する人、あるいはその後に落穂拾いをする人
豊作を唯、我が物にする人なのである、

尤も、だが、おそらくは、花の咲かない不毛の草地で
ギシギシ⁽¹⁾、ミチヤナギ⁽²⁾、トウダイグサ⁽³⁾の繁茂地で不毛なのだろうが
それでも一つの目的地に彼らの異なる小径小径は集つてゆく
だから皆は答を出さなければならない。ここで、あるいはこれから。
御覧なさい！

（死）が戸口で扉を叩いている、と彼は叫ぶ、

しかし何と彼には、熱に浮かされたその感覚には
星という星はカチカチと聞こえるように光り、風の低いうねりは
吹きつけて松の木に纏わり鳴り、群がり激しくなつて
恐れている耳には余りにも深く強烈で堪えられない

雷となり、ナイアガラ瀑布の轟音となることか！

十八

おそらく彼所有の小さな畠地にも 何らかの手入れが要るだろう。いつまでも一齊に咽び泣き、膨れ続けているのだから

雑草は取り除こう、唯、その中には

くすんだアスボデロス^(アスパデロス)が若干潜んでいる、

過ぎし日の花々^(ハナ)だ、何と美しく、何と麗しいことか！

それでも凝視^(ムツフチ)めいでたりせず 仕事に精出そう

短い一日の光が暗くならぬうちに 汝の手を使つて

それでも安易に荷担して表面より深く掬い出したりせず

鍬の柄の深さに鋤いて 君の類似のものを振るつて

土塊^(カケル)と花に押し入つてゆけば 深く埋つた穀粒から

もつと優れた種類の植物が生育するかも知れない、

枯らす熱にも土を凝らす霜にも動することなく、

種子が根付かないちは不慮の驟雨や折り悪しく吹く風の翼で脇に振り払われたりすることもなく。

十九

それでも無駄だろう、おそらく、世話をしても果実がそれを多してくれることなど、もしも〈前以ての運命〉が豊かな収穫を定めているなら

我々があれこれと事態に気を配つて

種子を篠いにかけ、初穂を遠く吹き飛ばしてもどうなるものか。

しかし そんなに疑わないでおこう 汝の労苦を難詰する

〈施与者たる神〉が詐欺を働くなどとは。骨折ろう、汝のこの上ない力と優しさの限りも疎かにしないでおこう、いずれは神が淀みなく十分に手を尽して汝に報いて下さるだろう。

見たまえ、回転している緯度圏の帶と黄道帶では

彼の恵み深さが小枝を出し 振り撒かれるが

それで汝に何が出来るのか 手を全く持たずに

一時間朝の到来を急がせようとしても。

あるいは 地上を縦横に星々が大きく飛翔している中を

彼の円周上に一つの惑星を宙吊りに留めておこうとしても。

二十

それでも精靈は必要だ。〈自然〉は最初の一息で

始まつたあの憧憬を解決することは決してなく
もつとやみくもな本能で尚も依存するのだ、

神か仏像に、^(マナ)〈馬群〉か人間に

あるいは更に下層では獸の奉仕に、猿や狼に。

ボルネオの波打ち際では裸の未開人が

今も砂に身を伏せてお辞儀をしては祈つている、

ギリシャ人に彼の神を与えて、彼の惡魔〈ビール〉を支配させよう
そして私には残っているものを、そういう御仁ならそのような大立者と
私が今日出逢つた人との違ひなど気にかけたりしない、
その農夫は市に出す荷の、羊毛の包みと

高地の干し草の束の上に 登つっていた。

彼彼らの仕事に馬乗りになつてゐた 骨折りの落とし子だ、
それで彼、オフィオン⁽¹⁾は 神々の中の初代の神なのか?

二十一

おお、父なる神よ! 今より幸せな日々に私の父は
困難な目に会つたらあなたに呼び掛けるよう命じました、
再び私は あなたの裁きの場に来て います
祈りというには幽かにすぎ、余りにもひたすら讀えながら

それでも 人生という艶な行路では決して所持していませんでした、見ようとしない眼と無頓着な耳とは。

私の頭をもはやあなたの嵐は吹き飛ばしませんし、

心のあの激しい悲しみと ^{よみがえ}あの凄まじい

涙とを新たに甦らせながら また別の日の朝には

今や酷く霞んで膨れ上つたこの幻影を押し退けて下さるのです
かつてあなたの足許に逃れていた時のように私をお導き下さい

労苦や立場や義務を見返りに課したりなさらずに

そして唯、あなたの足載せ台の前にひれ伏して

この両手を掲げながら涙を眼に浮かべるだけでお許し下さい。

二十二

朝が訪れる、赤らんでゆく金色と共にゆるやかにではなく
風雨と動搖を伴いながら荒々しく迫り立てられて
まるで風が闇を吹き払ったかのようだ。
さまざまに慘めさを嘆き悲しむ声が
光と共に目醒めて その厳しくがらつく陽に従う、
それでも私は春のこの日に、丁度折りよく歩みながら
依然として私個人の割り当て分を算定するのではなく

数え上げて いる、涙はことごとく知らされはするが。

おお、その強風に乗せて 我が悲しみを放り棄てられたら！

しかし、さあーと吹き払ってくれ、激しい突風よ、誰が汝に留まれと命ずるのか？

嵐の岬、岬を越えて 金切り声を挙げて歌つて

昼間より早く一日を呼び出して

水の光景に半ば和んだ眼に涙を溢れさせ

朝の光を嫌う心を挫きたまえ。

二十三

私は彼女を見ないのだつて？ 否、彼女が亡くなつたのだと

思われて以来、人は彼女の美しい姿を見てきたのだから、

人は彼女自らと同じく、麗しい苦い母親で

自分自身の運命に導かれて激しい同情を感じないではいられなかつたのだ、

それで彼女の最後の夜に 私のアンナはやつてきて

彼女の両腕の中に座り、彼女の名を呼びかけたが

その間もなつかしい微笑みは、と彼女は言つたのだが、星明りのように輝いていた、

彼女その人のように、と彼女は言つたのだが、美しく若々しく花開いていた、

唯、白いのはますます白く 赤いのは更に赤くなつて

彼女の重圧は霞より仄かに思われた。

そして、瞬時だが美しい言葉が現れた、

それを聞いた彼女も、それを私に告げることは叶わなかった、
それで十分だ、私のアンナは悲しみや恐れへ
逃げてはゆかなかつたし、どんよりまどろむこともないのだから。

二十四

おそらくは夢なのだ、しかし確かに眞実が輝きを放つたのだ

しばしば 夢の入口から脳髄へと

暗い彼方の山上が雷雨に光るよう、

今日、雲の裂け目の中から栄光が流れ出した。

何故 人々は疑い、躊躇い、蔑むのか

優しい精神である彼女が 漠然たるものの中から

光を掬い取ろうとするは何処なのか、尤も影は濃厚に浮遊しているし

自分ではすつかり説明できるわけでもないものを依然として彼女は重視しているのだが――

それは失われることはないし、軽視されるにしても幽かにだが
といつてもそれは形は雲のようだし、意味はほんやりしているのだ。

マノア⁽¹⁾の妻は疑つただろうか、夫に天使が

黄金の粒の中に立つてゐるのを示す前に、

デボラ⁽²⁾は恐れたのだろうか、それとも空しいものだろうか

アクティア⁽³⁾、アルロット⁽⁴⁾、マンダネ⁽⁵⁾が夢見たような幻影は。

二十五

私はよくこの低く燃えている火の側に座つて記憶を口説いて永遠に過ぎ去つた日々を返してもらおうとし、

私たちの愛が始まつた山々に、露に

浸つたなつかしい幸せだった森林地帯に呼びかけ、
その風景を書物のように凝視するが

彼女は見つからない。私に現われ出るのは

光と陰の中に拡がる庭や小さな森、
さもなければ私に見えるのは 遠く離れた岬で

整然たる閻兵下にゆつくり行進している兵士たちで

銃剣がぴかぴか光るその有り様は 太陽から旋回してきた

隊列また隊列が砲撃しているみたい。あるいは悲しくも私は
何マイルにも及ぶ月下の海を眺めており、あまたの波の雑草が
層を成して盛り上っている。そこでは湿つた砂が輝いて
波に洗われてゐるばかり、低い砂礁がその境界線をもたげてゐる。

二十六

何故なら〈自然〉は日々その壮大な意匠によつて
自らが最も明るく澄んでいると見える處で矛盾を示してみせるし、
私の方は彼女を聞き取る才能に恵まれていて

慎重な微細な洞察力によつて冷たい四月の花々を

緑になつた六月の終りに見つけた時など

実のところ神聖な感覚を授けられていると感じたし、

私の水車小屋に流れ込む寂しい小川の側わきで

あちらこちらに散見する厚板や樹の幹で

ヨタカ1が夏の真昼 角笛を吹き鳴らしたりすると

私自身も〈自然〉の耳を持つてゐると思ったのだから。

それで雨の降る真夜中 私は耳にしたのだつた

松の木から響くヒメドリ2の長いさえずりを

ネコマネシドリ3の銀色の歌を、明りの灯つた窓に

夜明けの徵よさを告げる不寝番の鳥を。

それで長らくじつとそれだけを、

二十七

絶えず心に浮かんできては 怒り、喜び、涙を引き出す主題だけを、燃えるような眼をして考え続けていいる心には我々が考えていることは現われないがしかし 捣り所を捜し回ると 見たまえ！ その真反対になる。

擦り切れた悲しみが悲惨な浮かれ気分に浸入して

激しい涙が笑いから流れ出だが、どかどか踏み荒らす

雷に 雨滴が地上に振り落されるみたいだ、

それでどれもそれぞれ どちらでもあるようにみえるか さもなければそれはその紛いものの振りをしそうだ、希望は恐怖であり

愛は苦惱であるというように。ここでもその不一致はやむことがない。
しかしあらゆる人間生活には勘定が行き渡つていて

苦境へと生れ出ると悲痛のうちに終る——

しかし、おそらく、その中間は 安楽であろう

塩を含んで湧き上がり 海へ向かつて淡水化してゆく泉のように。

二十八

円い自然界も 深い心も
その和睦には含まれない、青い深淵は
和睦を集めない、我々の矢は外れて沈み
唯、〈神〉の中に我々は自らの意味を見い出せよう。

知る苦悶、悲嘆、労苦の
至福は虚なきしい上にも虚なきしい。土の塊は

炎暑に急いで集められて背後に投げられて
我々自身や他の人々を盲目にするがだから何だというのかこうして
尚も土埃を攬んで風へ向かつて撒いても。

もはや汝の意味を求めたり汝の苦悶を訴えたりせず
根をつめて考えすぎたり突つかえ突つかえ話すのはやめて
不毛な蒼空を横切つて（神）へと向かうがよい、

鳥のように沈黙のうちに虚空を射抜いて、
鳥は更に一層速く飛ぶのに翼を開ざすのだ。

II ハネット第II集 (Sonnets: Second Series 1854-1860)

—

あの子は、とその農夫は言つた、ハシバミの細枝で
干し草の山の円錐のそばに半ば隠れているその子を指しながら
高々まだ十六歳なのに命じられたことをこなしますぜ、
日の出から日没まで赤子を揺つてあやしたり草を刈り取り束ねたりと。
私は言葉は聞こえたが殆ど理解できなかつた

それに 微笑んでいいのか苦痛を感じるべきなのか
それとも あの緑の小径にいた私と違つて

彼は昨日丸々一日 茨の間で

鋤で土をがりがり鳴らしながら當々と

耕して いたか、草刈りに精出して いたといふことか
他の連中が指先で花々を探し求めながら

森から深紅の染みを持ち返つて いた間に。

身体に触れたのは棘(一)だったのか、それとも
アメリカヤマゴボウ(一)が私の手に紫を吐きかけたのか？

二

誰もが皆 懈惰なわけではない、唯 彼は汝の仕事には何も見ないで
一日を束の間にしようと戯れながら
犬を連れ銃を手にアメリカカラマツ(一)や樺や松の中を通つて

木の葉を踏み鳴らしてゆく方が遙かに勇氣の要ることだと考えるのだ
あるいは旅籠の看板の下で一日ぶらぶらする方が。

それでもまさに彼の骨折りにこそ十分認めることが出来るのだ

彼と私の営み両方のうちに偉大な仕事が動いているのを。

でも実のところ何と私は、楽しくもない詩をこね回しているとか、

花々は美しくきらめきながら降り積つて

彼女の墓を優美に飾ってくれるのに、だから今宵私は

今や草で覆われたあの低い塚へと進み入つて

彼女の微動だにせぬ静寂を身をもつて知るのだが、その間 頭上では

創造が動き、あの農夫の少年は眠り続けるのだ

静かな力強い眠りを、唯 東が赤らむまで。

三

そうなのだ、大洋は遠方遙かなる沙漠から

泡立つまで爽やかに流れてくるかも知れないが

おお、彼には、愛と光を求めてかつては家庭を

心の奥深く思いやつた彼には、何が残されているのか、歩いては涙を流すとか。

それでも悲しみに驚きながら 彼は凝視め続ける、

己が過ぎ去った日を。泣いては己れの運命を知りながら

それでも愕然として立ち止まるのだ、急坂を登る人のように

しかも優しく夢みるのだ、あの小屋の部屋を、

ヴエランダには見付が巡り 薔薇が驟雨に濡れ

己が心と薔薇との間を段々を登りつめて

子供たちが眼っている部屋の窓から

眺めるのだ、赤い火のフォークを、あるいはもっと遅く来る時には自らが家を出て来た、くすぶつてゐる寝室に真黒で焼けつくような悪臭を嗅ぎとるのだ、愛と花々を求めながら。

四

孟

田 森

152

しかし悲嘆は、他人の病氣に幽かな慰めを見い出すものだが、唯、彼女自身の影の中を進んで行きたがる、

彼女のためには山の断層もどさつと崩れてなだれていきそうだ、

同様にあのどんよりした眼には、その荒涼たる細流は

霧でその裂け目を満たしたり、下方の野原を肥やす、

同様に最近の雨が確實に戻つてきて

不毛の松の木に突如として降りかかつたり

水蓮や緑のショウブ⁽¹⁾にしたたかに滴り落ちる、

かと思うと柔らかく盛り上つて歯朶を水浸しにする。

世界が潮れたからといって何だというのか、あるいは

太陽が、その高みからゆっくりと降りてきながら

秋の風景に覆いかぶさつて燃え上り

遂には谷⁽²⁾という谷が火口⁽³⁾となり、ごつごつした岩の

ヘルペイストス⁽⁴⁾の丘が、火に触れがちになるからといって何だというのか。

五

どれ程恥をかいでも、彼が思索を思い留まりはしないし、軽蔑されても、美が奪い取られるわけではない、彼は、日々の天空の下で、

獸道の傍ら、岩のそば、小さな森でその糧を採取する。

彼はありとあらゆる土地の川から水を呑み、

遠慮なく〈自然〉が風を吹きつける所で息をつく。

彼の考えはそういうわけで、自分が愛しているものに似ており、

雷を呼びそうな紫色になつて、〈カスカドナ⁽¹⁾〉峰のようだ。

かと思うと、草とキジムシロで幽かにきらめいている。

その友は嘲笑うような顔をして耳を傾け、

それは結構なことだと認めて首尾よく運ぶことを希つてくれるかも知れないし

「君の頭は惑星抜けだね」とぼそつと言ひ放つかも知れない。

だから胸に秘めてきた考えは、ぼんやりした無駄なものだと棄てるがよい。

陶器の破片や殻と共に腐肉の山へ放り出された

過去の花々のように、そして再び雨の中で赤面するがよい。

いや、とんでもない！ 欠陥は覆つてはならぬ。賢者は崇めるものだ

六

純朴な人々の判断を。荒々しく流れゆくのは

助言の言葉。だが、終りが示してくれるかも知れない、

不承不承の耳に 内容と音楽とを。

しかしこの上ない悲嘆は 愛がそうであるように恐怖を追い払う筈であり溢れ返っている川のように呻き声が続く。

それでもそれは後込みはする、微笑んでは横柄にも無知な賞讃を与える人々の、あるいは 身を屈めて肩を並べて

研ぎ澄ました指で粗搜しはするものの

敏感なものには触れず 未熟なものを擦つたりしない人々の、意味のない揶揄^{わざわざ}や御喋りからは。

これよりはましめたであらう、あの金槌と鑿を手にして

鋭い一振りで馬の乱杙齒を

引き抜くような亂暴な手術といえど。

七

彼の心は庭にあつた、が 頭は

意のままに火と燃える星々の間を彷徨つていた。

吟遊詩人、英雄、予言者、ホメロスやハミルカル^(一)の御同類が多くの天使と共に立っていて 彼の眼を捉えた、

諸々の悪魔もまた、彼の親しい仲間だった、

それでもその草花栽培家は、地面に

眼を凝らし、自らの逸品であるチューリップの球根を凝視めて

タンニン樹皮、骨粉、根切り虫、地虫について話すのだった、

まるで自然界にはこれほどに張りつめた緊張はないかのように、

あるいは技法について語る段になると、彼はその主題を

花壇の仕切り縁、芝生、花桶に到るまで滔々と繰り広げ、

あるいは、庭園噴霧器を操作して蒸気の楫を取り

もの言わぬ空に虹を噴出させるかと思うと

噴霧器を平らに持つて、壁や茂みを搔き払つたりする。

八

同好の友同士として私たちは、小さな森でも谷間でも
一時間また一時間と、辺りの夏を彷徨つた、

草地を沼地を、隈無く捜して彼の田舎家を飾ろうとした、

川や溜め池を、あるいは山野の雨の中を、

難しい名の薬草や効能のある植物は、⁽¹⁾ 捜さなかつたが、

アツモリソウや奇妙なムラサキヘイシソウは、⁽²⁾ 捜した、

そして尚も彼は話し続け、力説した、思索は自由であり

この上なく賢い魂はそれ自らの行為によって輝くのだと。

「だつてね、美とは」と彼は言つた、「眺める所にはどこにでも見えるものだよ、
荒地にも護られた土地にも同じように生長するし

サンザシ(3) 同様 荒涼たる丘陵地帯でも

同じように採取されるが、そこでは松がまばらに
むき出しの岩の辺りや闊いの隅に
乾いた小枝を落としているのが見つかるのさ」と。

孟

森田

九

しかし彼には そそくさと災難が訪れた

爽やかな春の季節、彼の花壇が緑になつた時に、

そして私の心は待つっていた、一点の疊りもなく穏やかに

我が家の中新たに花が咲くのを、

ところが花々、神々そして風変りな哲学は いずれも

眞実 貧しくて、その空虚になつた場所を満たすに足りない。

どのような喜びも 季節のお祭り気分も

おそらく実のところ 私たちの悲嘆を優雅になどするわけにはいかないのだ。

春は彼に 兄弟の顔を返してくれられるのか

それとも私には 掛け替えのない愛しい人を返してくれられるのか—— 私に?

夏は闌けてゆき 花のようにも衰えていった、
だが 雨がちな秋と紅に変った木の葉と共に
私たちは涙を催し 互いにもらい泣きするのだった。

+

そなたの赤子、もつと幸せな——頭上に太陽の輝く——

日々を 更に一層忘れ難い愛情でそなたの心に

抱き締められて過ごす筈だったその子も

そなたその人と私に授けられた誠に誇らしい分身だった、

私たちはその子のことを繰り返し語り合つた、——感謝しても余りある至福だった

その誕生、ベビー服、命名式、

私たちの心はすっかりこういうことに掛かり切つっていた。

冷たく、冷たくなつて彼女は横たわつてゐる、家一つ見当らず嵐の吹く所に。

その赤子の顔がここにある、殆ど悲痛の源となつて

それで私は、魂を酷く焼き焦がされて、ひどく衰えてたじろぎながら

望みを失い——なおざりに 自らの変り果てた有様を凝視して

たちまち倒れ込むか、さもなくば荒野の中に

焦げて火で固くなつた樹の幹のように立ち止まって

時間と運命の斧の刃を 殴つのだ。

十一

それでも このような泣きたくなる孤独をしゃにむに凌ぎながら
おそらく私は一条の光る慰めをひつたくつて
一息ついて そのきらめきを引き留めるか すっかり失うかして
進んでゆくうちに、それは暗くなるか あるいは唯、侵入してきて
妨げとなり前倒しになる、時々ここでそうなるのだが、
すると 夜おそくその疲れ切った技術者は

自らの機関を運転しながら ウエイトリ⁽¹⁾の森を進んでゆき
通り道にきらきら輝く角灯の明かりを見て

自分の途方もない速度を抑え、急いで手を動かして

逆回転させ、減速する——だが、再び

見たまえ それが燃えている所を、前方一ファーロン先を！
葦の生えた川岸の魔女の光を、
森と沼沢地の案内人は

消え去ってはおらず 荒れた森林地と共にいる。

十二

私の耳にこだましながら 何とこの上もなく値打ちがないと

その詩は聞こえ続けることか。人生、愛、経験、技芸が
溶け合つて悲嘆となり、悲嘆に満ちた心のようだ
何しろ感情という感情はそれ自身の情熱と必要な
力によつて碎けて涙、涙となり

価値がないのだ、唯、悲痛な水が溢れ出すのは

このような霞んだ眼にであり、思索と言葉を吟味はするのだ、
これは並々ならぬ欲望だ、形ばかり達成された行為だ
口にされない愛と喪失だ、永久に閉ざされた

門を激しく叩いているのだ、と。

それでも何度も何度も私はその染みのついたページを
捲し回り読んで、一ページまた一ページとめくつては
半ば信ずるのだ、その言葉は私の望んでいたものだと
そして私の詩をよくよく考えて、私の悲嘆に言い寄るのだ、――

十三

丁度その時、深く愛する人は　夢みながら気付かぬうちに
恋しい人の目鼻立ちは一時間一時間呼び寄せながらも
簡素な衣服や質素な寡婦権のことは考えず
彼女の稀なる優雅なあれこれを心に深く思い描くのだ――
黒い眼、黒い睫毛、旋律のような髪と、

それらは軽やかにアマリリスの花、ヒーマンサス⁽¹⁾、
フクシヤ⁽³⁾の花、アツバサクラソウ⁽⁴⁾と結ばれており
広い〈自然〉の法に適つた範囲で思うのだ

意図されてはいるが純粹な、あるいは誇り高い彼女の美しさに
全ては相応しいと、それで彼は自らを厚かまし過ぎるとは思わないのだ
彼女の顔をこの上ない黄金で飾つても

あるいはその乙女乙女したこめかみに

緑のダイアモンドや宝石ジラソールなど

宝玉の光を巻きつけて 辺りを圧する美しさで輝かせても！

十四

浜風は肌を刺し、空はくつきりと蒼ざも

蒼く 白雲が尾を引いている、そのような日に

私たちは波飛沫⁽⁵⁾の振りかかる砂地の突出部に

黙つて立つて 大海原を眺めていた。

そして海水浴客が 寄せては返す波の間を

出たり入つたりして身震いしながら戯れるのに眼を凝らす、

私たちの歩むはしから芝がふるえながら顔を出した——

再び私には 波がひたひた浸してくるのが聞こえる

岩々は黒々と盛り上がり 岩壁になり 洞窟には草々が生い繁つて、
 彼女の声は我が耳にあれども 未だ彼女は答えない、
 再び私は見入つてゐる、泡立つ浸蝕の跡の上の方に
 永遠のように立つてゐる蒼い高みを
 打ち寄せてくる碎け波から飛んでくる白い足、白い足を
 海の湧き立つ石鹼水を！

十五

ゲルトルードとグリエルマは双子の姉妹で
 谷間の古い農場内の家屋に住んでいた、
 悲しみが二人の黒髪と金髪に触れるることはなかつたし
 二人の芳しい純白の肌を疊らせることもなかつた、
 共に美しく、一人は背の高い身体つきだったが
 愛らしさときたら精神が他の世界を相手に
 勝ち取つたものだつた、両眼、額、微笑みなど諸々は
 暮れ方の薄明りが降りてくるよりも優しく厳肅だつた。
 もう一人は——私はあの日を果して忘れられるだろうか
 あの時、笑いざぎめく一群れからこつそり離れて
 ゆつたりした動作で空ろな眼差しで物思いに耽つていた

彼女の美しさが 激しい一撃のよう私を襲つたのだった——
 ゲルトルードは！ 紅い花の唇、絹の黒髪！
 それでもグリエルマは もっと遙かに麗しかつた。

十六

山の麓に、私が初めてその低い黒い屋根と
 蔓のからまつた煙突を見知つた時そのままに

赤い家が建つてゐる、それでも歩んでゆくにつれて見えてくる、
 小径にほんやりと 荒れたコウスイハツカとナツシロギクが。
 しかし彼らはいなかつた。優しい眼差しの姉妹の動く姿は見えなかつた

ヴエランダにも 戸口の上部の横木の上にも、そこでは、背後に

母親が座つていて、座つて口をぎゅっとすぼめて編物をしていたものだが。
 その家は 緑の奥まつた所で空き屋になつており

悲嘆に暮れたように美しさが失せていた。

荒々しく雨が入り込み 日没の風が

彼らの楽しく過ごした部屋部屋で溜め息をついたり

窓硝子を揺つてゐる——そして物音一つしない昼時には
 ガラスが窓から少しずつぱらぱらと外れ落ち

草に埋れた石また石の間で カすかに鳴り響いてゐる。

十七

転がつてゆけ、悲しい世界よ！ 水星も火星も、

これほど変動の多かつた年にそなたが私に

行なつてみせたほど速くは、あるいは遅くは、太陽の周りを

廻つてはいないので、それでも 苦痛、恐怖、悲嘆、災難や戦争には

自然な限界がある、恐ろしい日食から

素早い太陽は急ぎ去るし、夜は昼間を

締め出して昼日中にもつと光輝をもたらす。

花々は芳香を放つ連帶感を取り戻す、

月はぐるぐる廻り、ゆるやかに地球は沈む

自らの平衡に忠実に、そして持ち上つてくる。惑星は

逆行を繰り返す 盈ち虧けしながら、

昼間はどんよりと穏やかで、雨樋いは涙をしたたらせる

それでも私は知つているのだ 光の輝きが

まもなくばつと現わることを。見たまえ！ あそこは灰色が白くなつてゐる！

十八

それで大急ぎで手を振つたら変化が起きて 情景が一掃されてしまつた、

森は倒れてしまい、牧場の用地を横切つてゆく

獵師の追跡道も 犀の仕掛け径も忘れられて

火が ときわ木の湿地を呑み込んでしまつていた、

それでもしばらくの間 私が空想でこの秋の

丘陵地帯に草木を植えることを許していただこう 野鳩が出没し

野生の鹿が歩き回る。遮られて黄金色の陰をなす草の繁みを

インディアンの川 クオネクタカット(一)が流れてゆく！

ここで、だが、生涯は戻りする、そこでは今夜

カーテンの引かれた窓の背後を 覆われた光が降りている、

大理石のマントルピースの上高く置かれた

バラの花芽の上に、あるいは花瓶のスミレの上に

ここ 森の心臓部には 黒くなりながら垂れ下っている、

狼の囲(一)が 泉の側(二)の茂みの上に。

十九

そして顔々が、姿が、幻影が、数え上げられないほど
集まつて 霧のようにそよ風に乗つて過ぎてゆき、

次々に見苦しい影像を浮かばせては眼をうんざりさせる、

マスクケット銃(一)を持つ婦人たちが、撃たれて倒れゆく子供たちが

収穫半ばの畑の傍らに取り残されている、あるいは

インディアンの襲撃を　あるいは近くのヘッセン人傭兵を　恐れながら、惨事、貧窮、そら恐ろしい病氣。

かと思うと　燃え上がる村から木々越しに

私は見えるのだ　もくもくと真赤になつて巻き上がる煙が、

黙々と影なして過ぎてゆくインディアンの縱列が、

そのうちにその最後の男が　踏みつけられた草を起こしていると

王党派の司祭が非難し始める　口角泡を飛ばして

帽子に緑の枝をつけたシェイズ⁽³⁾の部下を

あるいは沈黙した族長のショーグやワッサホール⁽⁴⁾を。

二十

おお、辛い努力だ、このような過去の

暗い影の数々を　それより一層暗い悲嘆と混ぜ合わすのは

あるいは甚だ由々しい傷手をそれより異様な悲痛で量すのは

尤も　偉大な世界は苦痛と共にゆっくり回るものなのだが。

たとえ森のバイカラマツソウ⁽¹⁾が倒れて枯れようが

ゲルトルードがグリエルマの傍らで眠つていようがかまわないのでは？

彼らには彼らの涙があり　その涙を私たちに向けることはない。

しかし　私たちは私たちの死者を追跡する　呻きながら叫びながら、

二十一

見分けられなくなる閻や蛆虫の
状態に激しく抗議しながら、

それから黙つたまま座り込み 年月がゆるやかに進んでいく間
私たちは愛した全ての人に 陰鬱につくづくと思いを馳せて告げるのだ
各々の調べを、各々の愛の様子を、各々の音節を
唇を動かせながら、眼に涙を溢れさせながら。

昨晚私は 私たちが再び別れた夢を見た、
全てが終つたのだと。岸から外へ向かつて
ほんやりと船がますます小さくなつてゆくのが見えた、
それが彼女を私から 果てしない大海原をどんどん遠去けてゆき
蹤いてゆきたい思いに駆り立てた、と言つて神祕な感じに
襲われたのでもなく 海への古くからの恐怖感が甦つたのでもないし
唯、私は思つたのだ、知つていれば安堵していられるに違ひないし
太陽の当たらぬ深淵や 嶪の氣息を怖れることもないし
溺れることもなければ死の苦痛を味うこともないだろうと。
とは言え、希望が萎えてゆくのを見ながらも
辛うじて泣かずにいる人のように 私は悲痛のうちに

ほんやりしながら突堤に立つて 船を凝視めていた、
波はどんどん新たに碎け散り 私の唇に
塩の飛沫しおしおを振りかけた。私は身震いしながら身を翻した。

二十一

夜は近づいているが そなたの船を岸から離して
故郷を友人を希望を背後に残して

明りの下方へと帆走するがよい。そなたが気付かぬ筈はまずないだろう
おお 荒涼たる汝 朝が 白々と今明けようとしているのに
うねつている波の彼方にどこかの岸が安らいでいることに。

ああ、このせいなのだ 私が悲しみ嘆くのは、余りにも私は
涙のうちに人生の嵐の中を彷徨つてきたのだ

来る日も来る日も安息所や希望の現われない道程だった。

それでも私はうんざりしながらも 境界に目を据え続けているのだ
大海原に揉まれる陸上人として一日一日

陸地を待ち焦がれながら航海を続けて

水平線が上がつたり下がつたりするのを見ながら

自分の心臓が 帆走してゆく雲と船酔いの海との間を
依然として休むことなく駆けながら死滅するのだと感じている人のように。

眞実には 実際 精神の憂鬱を見通せても
理解されないまま壮大によそよそしく輝いているものもあるかも知れない、
私たちはそういう眞実の力の前に頭を下げるでも それを感じ取れないでいる——
すると不十分でも来たるべき生命の見込みが
死者を悼む者を祝福しながら 実際 元気づけてくれるのだ、

誰もが手に入れて読み取れる第一級の天体——

その發する光は意に介さないのだ、私たちの上方遙か遠くにあって
莊嚴だが、精神の必要にとつては何にもならない、
天の穹窿にある夜の星々同様に。それでも要するに

素晴らしい星の群が その栄光にも拘らず頗みられないまま
上昇して燃える間、これはその高みに
達してしまったのに ぐずぐず居残っているのだ、光が
空低く霜に覆われた天狼星のように戻つてきて
冬の夜通し きらつと閃きばつと輝くまで。

森 田 孟

ありふれた物おのものもまた

馴染みがなく悲し氣で、滅んだ夢の残骸のようだ、
痛ましく存在し、やはり愛情もよそよそしかつた。

その日は雨に終始し 風があまねく吹いている。

私は町を去る。私は山の斜面を登つてゆく、

切り株を跨ぎ越し 岩を乗り越え しゃにむに安堵を得ようと/orして

そして己が悲痛に意味なき怒りに驅られて

わめき立て落涙し、動することなき空に向かつて咆哮する、

だが、激しい嵐が私の叫びを運び去るばかり。

そこで私は引き返し 顔を隠して眠りに就く、

再び夜明けと共に相も変わらぬ鬱陶しさが さあつと巡つてきて

物の売り買い、とりとめないおしゃべり、笑い、小言となる、

まるで彼女が生きていたわけでもなければ死んだわけでもなかつたかのように。

二十五

ささやかな噂話は 窓ガラスに囁きとなつて
日の下(よした)の如何なる事柄にもやはり理由を見つけ出し
答が全く現われないうちに自ずから答を出す
それで個人としては喜びに浸される——

そこでこれと比べて彼の悲しみを計り、それと較べて彼の得たものを測り悲しみが多いか喜びが多いかどちらでもないかとせわしく思い巡らす。己れ自身の中に隠れている人 イケシオス^{〔一〕}の息子のために

おおきつともつと賢くなるう 彼と

同じ様に、彼なら町が鐘を鳴らすと

海外のニュースがあると知つても何事かと訝つたりはしないのだから。

こういう事情が重なり合つてゐるにしろ どうして私が対抗して計略を立てたりジョンが教会へ祈りにいったかどうかとか 隣人が

昨日の前のそのまた前の日に

何をしたかなどあれこれ思つて心を悩ませる要があろうか。

二十六

それでも無関心のうちに私たちは平和を希つたり

何もなすことないまま苦痛の感覚を失つたりするものだろうか。

喜びのないまま私は 心も頭も空ろなままで

氣を確かに保とうとも そんなことはやめようとも 殆どしなかつた。

私の人生にあつては 前進してゆく目的など明白とは思えない、

今日それは終るかも知れないし、さもなくば明日になるだろう、

生命はそれでも保たれそうだ 依然として価値のないものにしろ、

涙でほんやりした顔が金張りのロケットにガラスで覆われている。
しかし分別が生れてきて頬が紅く染まつてくると

耳に音高く彼女の親しく打ち解けた言葉が送られてくる、

「陽が沈まないうちに、決心なさつてよ、起きて！ 目ざめて！

そしてあなたのもさくるしい姿の償いをなさいませんな、
事実はポケットをまさぐつても見付かりませんし

知恵も指先を吸つたって出てきませんわ！」

二十七

しかし 心はその厳しい調子にざわざわする。

涙のうちに酷く沈み込み 酷く悲嘆に暮れる、

自らの血で一か八かやつてみるほうが遙かにましだろう

悲しみそのものの一滴を不十分にしか重んじゃないよりは、

あるいは死者を悼んで無為にすごすことすら惜しむよりは、

時を実際無駄にすること——私たちの嘆きを嘆くこと

そしてそれから心も生活もすたずたになつて

閉ざされた門から身震いしながら出てゆくことは靡弱することになるのだ

私たちが愛した者全てを。それでも中には凄まじい悲痛から

涙も浪費と思わず 悲しみを罪とは見なさずに

黄金をこつこつ捨い集めて自らの歩行を崇高にした者もいたのだ。
 それで彼らと同じような足どりで哀れにも彷徨う彼は
 彼独自の悲しみを見い出すのかも知れない、尤もそれに涙が、
 時の砂粒から洗い出された黄金の砂岩と聖杯が、伴うに違いないのだが。

二十八

それでも時々、心悲しく振り返りながら

私たちは 欠乏と悲嘆のうちに喪失した数時間のことを考へる

淡々と満足しながら一枚の絵について考へるように、

すると現在さえ親切な声々で 私たちの悲しみを

和らげてくれるようみえる、それで過去が暮わしくなる、

あるいは 病人の併せな忘我のようにみえる

とその時 転た寝の静けさそのものの最初のやさしい波に乗つて

強風を生き残いだ難破船のように

苦しめ恼ます怒濤に もはや持ち上げられることもなく

彼は安んじて進んでゆく、そのうち遠方の堰堤からは

夢の中のようすに幽かに遙かに彼には聞こえてくるのだ

脈動する槌の作業の音が、かと思うとどこからともなく

路傍の柳の木に吹き来たり吹き去る風が、

はたまた彼の枕の下の 時計のかすかなざわめきの音が。

二十九

生徒の頃私は どれ程しばしば学校の支配を嫌つては友人の許に行くみたいに〈自然〉へと逃がれていつたことか過労で視力が弱つたと言い訳しては授業時間を

遠くの緑の牧場で過ごしに行つたことか！

召集の鐘や時計の音も気にかけず

私は我が一日の瞬時瞬時を花々で指示示したのだった。

それでも嫌な時間のせいで縮み上がつた眼は

小数や被除数にくらくらしていたものの

泡立ち流れる小川でぱしゃぱしゃ洗われて

白く晒されたハンノキ⁽¹⁾の根の一本一本やあらゆる苔の塊は分つたものだ。

その月が何月かも バーベナ⁽²⁾の花穂で分つたであろう

どのくらいまで紫の小花の輪が攀じ登つているかも——おそらく

五月になつて始まつたばかりなら 夏の終りには

半分の高さになつているか、次第に衰え始めることだろうなどと。

それでも 楽しい少年時代の悪戯と喧嘩の際にでさえ
早々と私の心は 更に一層深い教訓を学んだのだった、

何マイルにも亘る黒く焼けた森の外れの辺りを

一人彷徨いながら、ただの雪片も飾りとなり綻となつて垂れ下がるのだと
そうして私は立ち尽していたのだった カナダの空の下に

全く孤りぼっちで、そこではコオロギの啼き声に

心臓がどきつとさせられるのだ、恐怖が眼に見える形を探るのだ

そしてロングアイランドの中空の孤立した岬で

海が鉄格子のように碎けるのが聞こえた。そして尚も

あらゆるものの中に私は聞こえるように思われたのだった

あの同じ深い挽歌が風に運ばれてくるのが、昆虫の小さな顫え声が

そして震えている波のうねりの轟きと騒音が、それでいて

分らなかつたのだ それらがどういう意味なのか、預言となる悲嘆なのか？

何のための幽かな前兆なのか？ ようやく今や 確かに私には分つてゐる。

三十一

私のアンナ！ そなたを思つて私が頭を垂れると

世界を取り巻く空、山、大海原は
内部へ向かつてある一点に近づく、そして今や再び
広大な〈自然〉が狭まつて殻と経離子になる。

夜が明け切つてからも それらは忘れられたりはしないし
夕べは早くから暗くなつて 夜の訪れと共に

しとしと雨が降り始める、嵐が荒れ狂つたりはしないものの

私には分るのだ その雨が彼女の墓を濡らしているのが。
朝になればそれは見えるし、日没時の雲は

その孤独な場所を指し示す、

起伏する谷間の上で、彼女のまどろみをずっと
見守つている作物が 敬意を表して風で飛んでくる。

私は 一面に広がるトウモロコシとうねるライ麦を見つづける、
激しい風が吹くたびに 私の心は運ばれてゆく。

三十二

ああ恋しい あの顔と足取りが！ 人生のこよなく
幸せな真盛りを 私たちを見詰めていた森と海辺は
茂みから姿を現わす私たちを見ていた
木陰で休んでは呼び交わす私たちの声を聞いていた

その汝らは何と陰鬱に曇つてしまつたことか—— 深遠この上ない涙が心の心から迸り出でますます集り集つて眼が見えなくなり涙で息が詰まつてくる、今と同じように私は君の影の前に立つて 汝らがやはりとても美しいことに気付くのだ。そして汝、悲し氣な山の流れよ 汝の広がりは密かにシダやガマの中を通り抜けてゆくが、私たちが汝の育む葦を搔き分け冷たい浅瀬で花々を摘んだ時そつくりだ、あるいはあの—— 呑りを挙げて轟く赤い砂礁の向うには—— きらめく緑の隙間隙間に森がみえ、横の方には車輪のように曲がつてゆく川の流れに気付くのだ。

三十三

ある静まり返つた夜のこと、私は一人座つて書いていた、非常に静かだったので 速くで ^{シンドウ}_{アトリ} ^雄_鶴 が啼き立てて私の耳に警告を發したように思われたその喉元には考えこむような反響が聞こえたが。むつりと座つていると 夜風の調べのようにある声が言つた、「何故彼は嘆き恐れるのか？」彼は知らないのか 神への訴えかけが無音のわけはない」と。

別の声が話しかけてきた、「彼の心は悲痛のあまりほんやりし

沈み込んだのだ」と。私には分かったのだ、それから その姿が身を屈めて
私に口付けしようとするのが。と、その時突然 私には再び聞こえたのだ

星一つ無い薄暗がりの夜の時刻に

その雄鶏が金切り声をあげては一呼吸おくが、朝の鐘が

夜の湾に〈それ〉を落としたのだ！ その幻影は落下してゆき

私は沈んでゆくその音に 耳を澄ましていた。

三十四

私のアンナよ 地上でのそなたの足取りは消え失せたが
庭や扉のそばに

そなたの立ち姿を私がもはや目にしなくなつたり
私が顔を光から隠したり この世での一日が

すっかり終るのを避けようなどとは しようとも思わなかつた。

たとえ私の足と並んで他の誰かが彼女の足取りで

前へ歩いてゆくことがあつても何だというのか

私はその小径を一人歩むのを恐れることなく

そなたのために愛しむだけだ 祝福し元気づけてくれるものを、
親切な言葉を、清らかな行ないを、限りなく優しい思いやりを。

希望を抱き目的を持つのをやめることなく、

私はそれらを預言者のように 私の日々の糧とし、
私の魂を安らかに育むことにしよう エスドラス書のエズラが
花々を常食としたように、あの幻影（まぼり）と栄光が到来するまで。

三十五

彼女のことを思うだけが 厳かなわけではない。

その思いは変化したし讀えられはしたが、それでも歡樂の
無邪氣で陽気な そして清らかなうら若い心の人々が占める場所が

あつてはいけないだろうか。それとも私たちは重大な過ちを犯しているので
彼らのような幸せは深すぎて楽しむわけにはいかないのだろうか。

そのようなことはある筈がない。自然な心の勤めは

自分の儀式に我を忘れてうつとりしすぎるあまり陽気に
なれない崇拜者と同じように心から賞讃を注ぎ込むことだ。

そうなのだ、そのような高揚した奉仕の働きは 嘆き悲しみ血を流して
苦しむ心の叫びを、そして何か苦い必要から

押しつぶされて出た悲嘆の呻きを、追い越すのだ、

私はこう信じているし 現にそういう気がしているのだ

彼女が再び笑うのを聞き 彼女の唇が

私の額に口付けして重苦しい考えを取り去ってくれるのを感じている気が。

三十六

さらば、さらば、おお氣高い心よ——私は夢見たのだ
時も死も 私の傍らから引き離すことは出来ないのだと
そなたの麗しい若々しい生命を、その清らかな明るい振る舞いのそばにいると
私の世俗の本性も静かでいられると思えたのだ、

しかし 仲間づき合いによつて方向は左右され

進んでゆくものだ、川岸が小川と共に走り続けるように、

おお そなたの現身のことごとくに備わつていたあの特質の巡りの、
我らが子供たちの現身の、そして私自らの干からびた小径の辺りの、
これら朦朧たるもの思いが、願わくは乾いて空しくなることなく

三月の土埃が緑の先駆けとなり 四月の雨が

復活の申し分ない日を予告するように 稔り豊かなものに

なりますように、そうなつた暁には この世のものとも思えぬ野中原中を

昔と同じようにそなたの手を我が手に包んで歩きながら

静かに流れる水の辺を 私たちは優しく彷徨えるのだから。

三十七

森 孟

エボニナ〔一〕がその昔 父親の大義というものを
訴えかけるのに 王の心を動かさんものと
墓場で生れた子供たちを 納骨堂の薄暗がりに
連れてきたように、私もまた わが〈造物主〉よ
あなたの足許に涙ながらに連れてくるのです、
長らく隠されてきて 光に殆ど耐えられなくなつてゐる
これら我が悲しみの子孫を。聞こえないままの 彼らの
さめざめとした泣き声があなたの御許にどうぞ届きますように
言葉の雲の中を 歌のすり泣きを通してはつきりと、

他の声があなたの御耳を貫くより銳くつきりと、
それによつて 考えたこと目指したこと口に出した言葉のいづれもが
彼らと共に楽ししそうに死へと夜へと去つていった彼女よりも
あなたの赦し溢るる愛を尊いと思つてくれますように
何しろ彼らと共に彼女は 九年もの長い年月埋葬されてきたのです。

明暗に拘らず

[ii] ハネット第三集 (Sonnets: Third Series 1860-1872)

—

かつてある日のこと一人で　と言つても得意然としていたわけではないが
私はある忘れられた哲人を腰を据えて熟読していく
廃れてから久しい時代遅れの歴史の

冴えない古いページを救いようがないと思いながらめくつては
「彼の手法」を読んで遂に自分自身の手法は失つてしまつた。
と　突然、日没の陽の輝きの黄金色の兆しが
その文字の上文字の上に投げ出された。

その日は曇り日だったが、その時は一羽の鳥が
歌を歌い始めた。私は我が草庵を心浮き浮き

あとにした、しかし門にも到り着かないうちに
太陽は姿を消し、鳥も去つて荒涼と侘しくなり
バルサム⁽¹⁾の木々が搔き立てる冷たい幽かな風ばかり、
私は再び踵を返して中へ入り　呻きながら
陰鬱に座り込んで　ダゴラウス・ウェイア⁽²⁾へと戻つたのだつた。

しかし 気分屋の〈自然〉は氣紛れに
押したり引いたりする 我々には自分が凝視^{みつ}めているものによつては
現われていなないものが見えるし それだけではない、だから
最もありふれたものに限界を設けるなり 目的を
持たせるなりすれば 筋の通つた別の使い道が見付かつて
これは廃棄する あれは無効にする となる。

孟

草の茎一本、埃一塵、石一つにも
衆知のものとは異なつた役割がある、

商業になつてゐる慣習、防壁になつてゐる水車場など。
流れが浮遊物の積み荷や船体を曳いてゆくのは
内陸の土地から海へだけではなく
遙か後ろ向きにも 北方へと風に逆らつても
川はきらめきを放つし、カモメが陸地を越えて飛翔し去るのではなく
丘陵へと飛び來たるための本街道もある。

三

122

それでも 彼のために低く垂れこめた空模様の雲が晴れるわけではないし

彼を慰めるために曇りを払う突風が吹くわけでもない、
彼が夢みるにしても自分のことだし その呼吸が衰えても

何の栄光も彼にしかるべきものになるわけでなく 彼の債務者にも救いにはなるまい
彼自身の憂鬱を作り出し生み出すのみだ。

しかし〈自然〉はそなたを樂しませるために大声で笑うだらう、
おお信じて疑わぬ子よ、汝は彼女の心に寄りかかったのだつた
嵐の一吹きごとに 雨の降るたびに。

だから一日が更に荒々しく もつと風が強く 雨が多くなつても
そなたはうんざりすることもないし 忠誠の心を終らせもせず

愛情は浪費にならず 献身も無駄にはならない。

それどころかむしろ そのような日は抱き締めやまぬ

〈友人〉のようなもので そなたを彼から引き離してもつとよく見、

更に一層よく見て 再びそなたをしつかり抱擁することだろう。

四

ベニシダ⁽¹⁾の薄くて小さな葉は 紗模様があつて鋸歯状で
緑のヤニマツ⁽²⁾の長く湾曲した帆縫い用針⁽³⁾だが
ありふれた砂地の草と共に地平線の線上に接している、
それにこれらの上方に広がる不朽の青といつたら一

五

ここに私はゆつたりと横になつて優しい気持で眺めさせてもらおう
この世のあらゆる嚴しさが 偉大な〈贈り主〉の優雅な手に
軽やかに触れられて滑らかにされたみたいだと。

一年も終りに近いからといつて それが何だろう 幾つかの色が
何しろ乾いた草地の中を走つていて 幾つか繫がつた美しい旋律なのだ。
やはり私は こういうものに慰められ宥められることにしよう

そうすればこれまでよりは幸せになれるだろう あの頃のように、学校時代は終つてしまつたが、
当時私たちは 盛りの花から霜でずたずたに裂けて色褪せた
花へと追い回したものだった。あの最後の赤揚羽蝶を、
かと思うと 糖蜜だらけの口をした老いたバッタを。

何とよく覚えていることか 私たちはよく知つている小径を通り
中央広場を横切つて 威儀を正して歩いたものだつた、
私はといえば青いリボンで飾られた銀の記章をつけ、
妹は書物と石板を持っていた、
〈池〉の傍らの欅の木、木製の柵、
その角には埋葬地があり、
一度 私たちは禁断の鉄格子をくぐつて横切つたことがあつた

私たちの邪魔をする石また石、墓地のそばの雑草、
薄気味悪い風のせいで、私たちは道半ばで引き返したものだ。

小径小径をどれ程の速度でだつたか飛んでくる

落下物に打たれながら 神に祝福されず許されもせず

私たちはその日も遅い時刻に家路を急いでいて

聞いたのだ、疑いの余地もない畏怖の念に打たれながら、

神の怒りが暗くなつた天空でぶつぶつ呴くのを。

六

私は見ていた、大海原の波のうねりの彼方に
長々続く土地の隆起を、一連りの雑草を、盛り上がる泡を、
苦々しく心で憤りながら、私はこれまで

このようにうろついたことがあつただろうか、何に役立つのだらう 眠るのに?
それとも目醒めているのに? あるいは苦痛に? それなのに依然として海は
ざわめき歌つて、「一様にー そして私にも一つー」と。

そうだーかつて私は この海岸を余りにも幸せな気分でとことこ歩いたことがあつた
自分の喜びを岩々や地面に眩きながら
そして波が岩棚や砂礁に音高く砕けて いる間に
一休みしてはそれに囁いたのだつた、心の夢や

七

喜びを語る人のように！ それでも尚 海は
その洗われたり引っ込んだりする貝殻の砂洲の上を
寄せては返し 足を引きずる柔らかな音を立てていた
まるで湿りが乾き、喜びが悲しみでもあるかのように。

おお 神聖なる休息よ！ おお 黄金なす愛のこがね

確かさよ！ 愛が幾らか微笑みである時 光明を投げかける苦痛は
言つた、明るい事柄は全て不变のままなのだと。

夢みながら私は従つている のろのろ低く流れる小川に

彼女の花を思われる物腰に 彼女の目も綾な山歩きの足取りに。

ああ、私は思い出す 彼女が少しでももう一度見てくれなくなると

私の幸せな心の中の音樂は損われ 私は疑惑に落ちこむし

彼女がこの上なく幽かに溜息をつくだけでも

私の王国のしつかり固定した列柱は揺らぎ

靄と嵐の闇の中に混り合つてしまふのだ！

そしてこうしたもの全てが一緒にになると 私が雨を見ていた時のようになる

というのもその時 騒雨という騒雨は風の中で揺れ続けて

強力な振り子のように急き立てられたり追いやられたりしながら

地上と空との間を前へ後へと打ちつけるのだったから――

八

どこか高い山の頂てっぺんで振り返った人が

あらゆるものを作るがままに眺めるものの、それが場違ばりたがいなために逆の認識を得てしまうようにはほんやりと

若き日の夢を辿つて愛いとおしみながら何も見えないままに

立ち止るのだ、というのもそのような気分では私たちが生涯ずっと歩いてきて知つている陸上の目標も道も

実は知つていたとは思えないし推測もできないのだから、

それでは自分の足跡を真反対の世界でそれも

自分のずっと彷徨つた所ではるばる私に告げ知らせてくれた人のようだ、

その間熱風がむし暑い北の方から吹いていたのだ――

木陰かげも作らぬ森と海の中のよう

錐さやが沈んでゆく底無しの砂地さわちとが

地上から雷光に打たれる空を、血のように塩辛い雨を、

火と燃える雪の飛翔を、見ていたのだった。

しかしようやく 私たちの生活は秩序立つてくる、

尤も回顧すれば 色々と混ざり合つてがたびししてはいたが。

碎けた大志、場違いであつたり余りにも早々と

費えてしまつた愛情、過ぎ去つた事でのあれやこれやの中傷、

悲しい事ども甘美なために脳裡を去らなかつたり喜びも苛々させられるものだつたり。

しかし〈時〉が悩みは忘れさせてくれるだろうし

〈沈黙〉は 言葉によつて与えられた打撃の数々を縛り包んでくれる、

それで私たちは〈愛〉とか〈名声〉に恬淡として暮らすのだ

光輝く〈名前〉よりも生き延びた彼のように、

それで〈平和〉がやつてくるのだろう、夕べが彼を訪れるように、

今や人々の指導者ではなく もはや誇ることもなく

貧しく人目につかず、太陽の縁を凝視めながら、

彼方の雲がほんやりと消えてゆくように消え失せることにも 満足を覚えるのだ

そして太陽が消えるように同じように消えてゆく、薄すらと同じように。

森 田 孟

十

時々私は 深々とした水が陸地をひたひたと

浸す所を歩く。あるいは空想に駆り立てられる所を

歩きながら物思いに耽つて独りごちる、まだ半ばしか形を成さない考えを
もぐもぐ唇を動かしながら語ろうと努める人のように

そして大海原を、大洋航海の船を、眺める、

心楽しいわけでもなく。それでも私は唯 自分自身には気付くし

私の落ちつかない心の落ちつかない幻影は見い出すのだ、

唯 我が彷徨さまよえる言葉が呻くのみ、

唯 輪を描き飛ぶチドリが咽び啼くのみ、

そしてこの高みの岩は その下を海が巧みに

忍び込んで長い洞窟となつていて 私の中の我が涙のようだ、

それで私はこのように強ばつて立っている、打ち拉がれ物が見えなくなつて、

この荒涼たる岩には一面に地衣類がこびりついていて

塩の糞みのけど鳥たちの積み重ねる白亜で灰白色になつていて。

十一

ロングアイランドよ！ そうだ！ 初めて私が入江と湯ともども
汝の遙かな幽かな海岸を あるいは驚おどろこまる森の平地を
一望の下に収めた時 そこはクリスチャンがくずおれて眠つていた
あの土地のように すつと氣絶するような所だつたが

私は彼のことを思ったのだ、そしてそれから雨の中を
私たちは宿へ着いたのだった、だが居合せた人々が
手近の〈炉床〉、〈悪魔の首〉、⁽³⁾〈結構な場所〉
そして西方遙かなる〈シナイ山〉を話題にするのを聞いて
私は夢見心地で再びあの巡礼者の足取りを

踏んで〈天国への道〉を辿っているような思いだつた！
だがそこには〈幸福ジャック〉が物言わぬ〈樂しませる〉と共に座つており
馬丁の〈赤毛アイク〉はひゅうひゅう声を出しており
私が〈遵法〉と呼んだ老人がいた……
する賢くも奇妙なその物語を　彼は私に話してくれた。

十二

「この森一帯の運搬人　若いサイラス・ロングは
ある夜　やたら上機嫌とはいかない気分で　自らを納得させていた、
見慣れない羽毛帽子をかぶった男の土左衛門が
岸に打ち上がるのを目にしてばかりだった。実は以前に一度
丁度同じ時節だったんだが　奴がサウスオールド湾で
引き網をたぐつてた時　水夫の死骸がざぶざぶと
上がってきて同じような帽子同じような顔をしてたことがあって

そのためその土地は不幸に見舞われたのだった。

物思いに耽りながら 奴は馬車を走らせていた、と何と道の向うに
見てしまったのさ、時すでに遅くてやつだが、そこに死体が伸びてて
車輪が傾くのを感じたが 馬を止められなかつた

いや 直ぐには、それから——自分が帽子と呼んでおつた
古い布の覆いをびしゃと放り棄てると——
後ろへ走り戻つたんだ、十歩かそこら、すると何にも見つかんかつた……

十三

そうなんだ！ 地面には枯れた松に鹿の足あと、——

それで大急ぎで また五、六歩引き返した、

奴の帽子は失くなつていて その代りに投げ出されていたのは
その二度溺れ死んだやつが着けていたアビ⁽¹⁾の皮そのものだつた、
綿毛には 二、三本海草がくつついていた。

それでロングは家へと戻つた、帽子と正氣を失つてね

しかしそれでも残してきたその死人のものは見せびらかすことはできるし

あのアビの羽弁は、奴の言うところでは、海鳴りが響く時には這い出すんだとさ」。

そこで彼はその話を語り終えて 自らの言い分を述べた
強調するつもりだつたか 系としてか

石炭の地層にカンシャク玉を吐き棄てた。

「それで、どう、どう、どうロングのはなつたんかね」とアイクは金切り声を挙げた。
しかしその老人は ここで立ち止つて 火箸に手を伸ばし
パイプに火をつけて ヒューと言つて去つていった。

十四

挿話の一つだった、とは言え、荒海の地方の――

というより実際は人生の――粗野な味わいだが

そこではそれでも驚嘆すべき歌や物語の

秘密の種子が さ播らぎもしないでいるのに気付いて

我々はある水夫の冗談と荒削りな態度を多とするものだ。

更にもつと歓迎だ、旧式の炉ばたも

干潮時の悪魔の前掛け浜も

鮮血したたる醜聞や ジめじめした新聞記事よりは。

ここに私の夢みがちな子供時代があつたのだ、耳を傾けながら

思いを凝らしていたのだった 風や難破船の物語に

島や奥地への旅に、波、テーブル、歯のような

形だと発見された海へ突き出す岬々に、

〈ピテルブース⁽¹⁾〉になる筈の 〈オールド・ピーター・バット⁽²⁾〉に、

ジブナルタル海峡や険しい〈ヴィスグレイド⁽³⁾の岩〉に。

十五

しかし 私たちは成功しようと努力するようになっていて
一息ついて何らかの他力を懇願しようなどとはめったにしないし
いつの日のどの時間もその独自の記録を白墨か木炭で

書き記すものなどとは考えない、

私たちが過つて何を主張しようと やみくもに何を言おうと

「私が〈眞理〉であり〈人生〉でもあって、しかも〈世の常〉である」。

それは慰めたり嘆然とさせる言葉であり

厳かで甘美な勧告であり 純然たる警告だ。

しかし 死や非常に恐ろしい責任も

私は今夜は殆ど懼れないか全く感じもしないで

私の空想がちかちかと明るくなったり暗くなったりして光るのを凝視めている、
その有り様ときたら 燐えさしから火花をぱつと攫み取った火花が

飛び散る閃光の中で落下する前に分裂するみたいだ

そしてせわしく動いている長い炎はすつと伸びて消えてゆく……。

—

それでも尚、都市のように我が魂は、

高地に根を下ろして所を得ているようにみえる、

その間おずおずとうろつきながらその魂の根元には
夜が近づくにつれて尚一層近づきながら寄り集つてくるのだ
ぼんやりと雲のような人々の群と馬の群が、

丘陵地帯に野営しているどこのかの一層強力な部隊の

前哨地点の騎兵たちが。と見る間に 突入した彼らから

雨あられと降りくる降伏勧告の石もろとも辺りを駆らせて矢が見舞い
石弓の矢が交差し合つては落下する、

遂に〈疑惑〉は〈希望〉と戦い、〈恐怖〉が彼ら双方の
邪魔をしようと企む、それで魂は最も奥深い

城砦にして要塞にまで退却して

眺めるのだ 遙かに暗くなつてゆく地平線の彼方を、
漠然たる騒乱を、悲嘆の光を、動きゆく戦闘を。

二

だが、〈思考〉は鎧兜で身を固めた長身の射手よろしく外部の狭間胸壁の上を踏み歩いてゆく、

広大無辺な深淵や隔りなど全てを

取り巻く薄暗がりの秘密を——銃眼と

裂け目から——貫き通さんものと、

周りに手当り次第に送られてくる矢の雨をものともせずに——

だがその間、騎兵大隊は足音高く雲集し旋回し

重い装備に妨げられて離瓣しているうちに

彼は飛び道具を落とすべき所に投げ込んでいる——

兵器を今や前よりは低く、かと思うと、前よりは高くと操作しながら、

それは強力な射手が鋼鉄の弓を扱うみたい。

しかし中には流星の如く、闇の中に解き放たれてゆくあの

やみくも冒險の水準に達するものもありそうだ、

それほど疾くその矢は飛んでゆき、火がつくのだ。

三

こうして精神は独自の深い衝動によつて
稻妻が一瞬のうちに辺りを照らすように

引き裂くことができるだらう、罪の陰を、
終日周りを歩き回つて決して眠ることなく
夜通し壁を凝視めて歩き回る死の姿を——

しかし自らの死のではない。人間の臨終に際して
神が与えるのは我らが使う光、我らが保つ力。

だからその力を使おうではないか そうすれば我らは
おお、おそらく他のものを授けられて一杯になつたりせず

白い装いで終焉を迎えられそうだ——

だから日々それを使えば 人生の
神祕に触れることになるのだ、雲、風、木の中で、

周りに住む人間の顔々の中で、
そして天国と地獄を知る深い魂の中で。

四

そつなのだ、汝が何者であれ 汝の〈神〉に与えたまえと祈ることだ
敬虔な気持ちで仕上げられる何らかの仕事を、
従える何かラッパの調べを、聞える何か立派な聞きを、
汝の武器を置いて立ち去る前に。
自分自身についてとくと考えよう、自分の灯火が燃え尽きないうちに

自らの全力を結集して企て創造しよう、
しかし淫らな物想い、白昼夢、

心の花模様飾り、それに空しい想像は

避けることにしよう、さもないと始まりかねないのだから

汝の塔や天幕の入口のそばで

汝の夢心地をカンカンガタガタと耳障りな騒音で搔き乱しながら

激しく汝に耳を澄ますようと驅り立てる筈の呼び掛けが——

大声で、丁度　夢を見て　いる征服者の耳許で

アンティゲニダス〔一〕が戦争の心得を怒鳴った時のように。

五

それでも幾人かは居る筈だ　さしあたつて信ずる人たちが

彼らは神の命令に　嫌がられながら従うのだ

彼らは径に迷つて天国への道を保ち続けるが

絶対の天国でつまづいて　忽ち　赤く染まつた溪に

落ち込む。汝はそのような壯麗なものを

攫み取つて王位に就こうなどとはしない。

忍耐し、希望を抱き、惨めに嘆いたりはしないでおこう、

罪惡が冷笑しても、それでも善は持続する。

六

今まで我らは白いのが神の御前近くで
侍つてゐる所を見ようと思えば見えるのだし 一瞬の間は
天使の顔々をじつと見ることができるだらう、たとえ
彼らの声の聞こえる所に居ても知ることはできるだらう
我らを彼らの地位の近くまで引き上げるのは愛より大きなものであり
人と人との貴重な仲間としての助力なのだと。

それで 二人を私は知つていた、老人と少年で
互いに援け合つていた、この二人が一日を費やしたのは
森の樹皮採集にだつた、彼らは遅くなつて
家に帰り着くと、年長者はもう一方の教育に
時間を使つて 自分が知つて いることを教えた、
歴史について、神話について、あるいは難しい数学について、
夜の時間が経過して、夜も更けると
少年に〈ヨブの柩⁽¹⁾〉と、〈黄金の庭⁽²⁾〉を示し
月のない青空に九箇の月星⁽³⁾と
大きな〈獸帶の円周⁽⁴⁾〉を示してみせた、
そのせいでその子供は 空を愛する青年に成長し

森の中では注意を払うようになつた、ペイツガの樹皮の向こうにそれを覆つて生える錯綜した苔に、
終日の露にすっかり湿つた翳つた花に。

七

しかし戦争を 彼を転覆せんばかりのラッパが吹き鳴らした。
それでその突風で二人をしつかり繫いでいた結び目がちぎれて
ばらばら散乱した、一方はそのおぼつかない足取りを北へ向け
若い方は戦いの籠をやみくもに引いた、

それで全ては巧く収つたようにみえた、涙の理由や喜びの原因ともならず、
しかし便りがやつて来た、さもない時にはその代りに

書かれた言葉が、読み難い手蹟だつたが

老人には愛しかつた、彼が少年に教えたものだつたから。

遂に全てが止まつた、最後のものが最後になつた、

だがそれでも彼は読んだ、優しく信じながら

一通一通目方を量つた、そうすれば何かの繋がりや手掛けりが見つかるみたいに。

そのようなものは何も生じなかつた——しかし毎日毎日を老人は過ごしてゐた

次々 手紙について あれこれ考えながら 物思いに沈んで、

黙々と 悲痛のあまり 眼を火と燃え立たせながら。

八

それも不思議ではない、肉体の時間に束縛されて歩む我らにとつては、もしも美德自身が束の間陽の当らぬ水のように鈍く輝くならば、他方

美と悪とを和解させようとする優雅な悪巧みは――

ハマタイトやダイヤモンドのように内部の赤い火花で点々と血の染みがついている――非常に巧く運んでいて善と調和しているようにみえるので 精神は喜々として一層広い範囲に十分噴出する。いつまでも物憂そうに

一つの攝り籠で捕れながら眠つたりはしない、

あの膨大な雑草のようには、何しろそれらときたらダカンハ島沖〔2〕で

巨大なシダ状の葉を大波に打たせて悲し氣にはたはたと波に浸らせながら

海がうねりにうねつても落ちついても

その深みから引き裂かれたりはしないのだ。

こゝ、アメリカ先住民が木々の葉を一掃して

九

強壮剤用樹皮や冷却用の木の根を求めて掘った所に
路傍のリンゴが無愛想にその実を落とす。

まさに彼の最も内密な森の奥深い中心を通つて
山並みを越え 川を涉り 沼地の辺鄙な所を抜けて

そのありふれた本街道は、今日、内陸へと走つてゐる、

列車が長い嘲りの叫びを挙げてゴーゴーと突進し

素早くそれに統いて工場が 学校が 鍛治場が建つ。

そのようなものに私は注意を払わず 彼方にハンノキが枝を伸ばす所に
私の気分を癒すための不思議な植物を探し求めてやまない——

機敏な野蛮な感覚を働かせて私は立ち止まつたり、

もじやもじやした松の間を彷徨つたり、山の険しい岩間を登つたりする。

辛棒強く眼を凝らして、安全な足取りで、

まるで族長ジョージ⁽¹⁾と森を歩いていた時みたいに。

十

汝はあの預言者の奇蹟が覆つたのを見たのか——

触れられると小枝そつくりの姿をする虫のように?

それとも旋回する蜘蛛をたちどころに眼に見えなくしたり

精子の匂いをベーベリー⁽¹⁾の花の香りにしたりする手際を

与えるのは何なのが思い巡らしあることがあるだろうか、
 あるいは冷たい海岸の泡によつて歌い出す砂を聞いたことが、
 あるいは時節もおそらく——遠くの内陸の秋の小森で——
 小さなオオアマナを刈り取つて その酸味を
 味わつたことがあつただらうか。それなら来たまえ
 私と一緒に、遅れずに、そうすればこういつたものをもつと多く
 見せてあげよう 最も小さな自然の秘密の数々を、

どんより曇つて寒い最初の朝

一日の陽がまだ差し始めの頃に一番早く咲く

花々を静かに探しながら 東の方へと採集しながら。

五 フネット第V集 (Sonnets: Fifth series 1860-1872)

—

しかし〈自然〉は 与える際には同じやり方で与えるに違ひない、
 富める者には授け 貧しき者には差し控える
 それで我々には、はつきり見える多くのものが
 ある人々にはほんやりとしか見えず、かと思うと他のある人々には
 やはり眞実——我々の感覚には覆われ畳まれている——が

光のように公表され、風のように周知のものだと分かるのだ。
しかし懐しき〈母〉は、自らの火の周りを動き回る。

その炎に燃料を補給し、その世界を養い

そうして自らの出産という役目を果たすのだ――

彼女が世話をするのは、理由があつたり勿体ぶつてではなく
実りがあるとかないとかでもない。彼女が望むのは
唯、奉仕することであり、自らの必然によるものだ。
創造と権威とは、〈父なる神〉のもの、
これまでの過去もずっと、これからもずっとそのままに。

二

それで、彼女は手で後方へ、陽が当つていて冷たいとか
疊つていて熱いとかいう奇妙な尺度を投げかけたり
農夫の麦を 踏みつける雨で台無しにするようにみえるが
それでもそのような荒地にも魂は荒地を認めず、

この上なく不毛な海と陸のそばでも落ち穂を拾わんとするのだ。

というのも 長らく忍耐強く待つ者は誰でも

ある動きが足許で起きているのに気付くことになるだろう――

彼が唯待つてているだけで自らを大いに賢いなどと思つていなければだが。

三

と言うよりむしろ、その精神そのものから あるきらめきが
闇の上に注がれることになるだろう、空虚からの喚び出しが
ほんやりと彼の知性の灯火の辺りに姿を現わして
これらを招き入れて彼に見させようと/or>する、

沼沢地を歩む夜行性のゴイサギ⁽¹⁾
燐光を放つ胸で溜り水を照らし出すように。

それでも今夜、夏の日の光が絶えてゆく頃

私が夏の突風を物ともせず野原を横切つてゆくと

私と共に埃のように足許から一斉に

蚤とも紛うバッタが飛び立つて蠅のよう

乾燥が日照りが長く続きそうな前触れを告げた、それでも

変化が予想される所では 窺える微(ほる)しあはずれも

旱を示すには到つていない筈だ、雨降りの予想がある時だし……

私は分らない。今晚 不可思議に思われた数々といえば、

ひどくひしひしと圧迫してくる野原一帯からの

葉片の重荷、強風の空費、

彼、我が小さい息子が 永続を象徴しながら

梵天神^{ブツツノミコト}のように爪先を口に含んで座っている所へ、
しかも全く無意識でいる所へと
羽搏き飛んでゆくこの上なく小さな命のきらめきだ。

四

しかし人は、仮に居場所はあつても

深淵を測る手段は見い出し、驚異が現われ出すのを眺め、

蜜蜂の巣の如き形体や構造の中に

引き籠つた極限の空間の中に全世界を見、

己が太陽の位置を突き止め、その宇宙を把握するか

各天体にそれぞれの位置へ分散してくれるようになると頗むかするのだが

今では月と星に閉まれたあの偉大な天使のような
状態にあるようだ、今や避難場所にさえ焦がれて

雷雨を追い払う屋根だけでも切望する有様——

さもなくば自らの褒められすぎの嫌いのある力量や叡智が

言葉の無数の意味の中で見失われて空しいことに気付くか

恐慌状態に陥つたままその剥き出しの意味から直すかかる、

というのも 大地は大地か炉床か欠乏か土砂であり

我らのあるか無きかの頭上に持ち上げられている空が天国なのだから。

梯子はどこに着地するのだろうか、誰が知る？——誰が知る？

惑星を戦いの行軍でのようすに地帶ごとに

役立たせるためだけに攫もうとする者は

幻想による必要や難儀のために止まつたりせず

ブルース^(一)の場合のように進み続け、心を傾けて

夢想家と怠け者は置き去りにするだろうか？

偉大なものだ 彼の仕事は 確かに、彼の奉仕は偉大だ、

彼は〈自然〉を探究しながら、しかし支配し、

打破し その所有物を奪い取り、上方へと組み立て 創造し

自然を妨げながら 盛り上がったものを運び

肝心なところを結果——町々、錨索、車、船——へと引っ張つてゆく。

私が霞んだ緑色の牧場でのろのろと窓いでいる間に

彼は活力に満ちた足取りにより、階段を一段一段昇ることによつて 自らの進路は 真理の裡にあると看做す、だが私は付け足すのだ、峨々たる岩を峨々たる岩に。

森 田 孟

他所者が一人 赴任して來た——我らが御婦人がたを畏怖させんと——
彼は我々に キリストのこと、シビラ⁽¹⁾の洞窟について語つた、

コペルニクスに少し触れた、少しも知らなかつたのに、
そして我々に地獄を、聖なるものの留まる所を、示した。

「星々は」と彼は言つた、「北極星の周りを滑つてゆきます——

というのも そこにこそ天国があるからです——輝きを増しては夜な夜な語るので

「しかし星というのは動くのでは?」と私は言つた、「それともそうなのですか?」

彼は落ちついて答えた、「私たちにはそうなるのが分かります」と。

それで十分だつた。群衆は満足した、

それで、私は黙つてしまつた——それでも頬の赤らむのを覚えた。

彼はならず者、氣取り屋、それとも道化師で

このように身を屈めながら我々の無知を啓發せんとして
自らの無知を照らし出す結果になつたのだろうか?

七

あの晩、町の人々は出かけてゆき 公会堂はぎゅうぎゅう詰めになつた。

それで私はといえば 多分 意地悪からだつたろうが人に

その講演を聞かせてやつた、私はどの講演にも行かなかつたのだが
どの講演にも行く古なじみの友が私を連れていつたのだ。

ところでその主題は 思い出しても無駄だった、

言い回しときたら大言壯語だし 賒諭はまごまごし通しの上、
意味はないし、すつかり終ったのは何時どの様にしてだつたか、
祈りで始まつたものが詩で終つたのだ、

頑固な人々も心打たれて涙を流し、明るい唇も
賞讃で息もつけなくなつた。しかし私の連れは

口をきかなかつたが 嚅かな皮肉を籠め 茶目氣たっぷりにこうは言つた、
「ぼくたちもあれ程の学識と光明には今までめつたにお目にかれなかつたね、
何しろあの北部出の先生(ヤンキ)ときた日にや この間の三月に
九人のお仲間(ヤクニ)の所からイリュリア(アフリカ)へ下つて來たんだからね」。

八

庭の小屋は およそ風変りもいいところといった植物で閉ざされていたが
近くではそれでも数頭の雌牛を 細つそりした少女が放牧していく
幾らか期待に満ちた明るい表情をしていた——私は あの朝を
思い出して こんなに恐れる必要があるだろうか？ 私たちは二人共
騒々しい退屈な広い都市へ馬車で出向いたのだったが。
全くのところ、驚いてあたふたとここへ急ぎ戻ってきた今
お願いだから そなたにはあの平和だった所を思い出して欲しい、

あの乙女の微笑み、幸せそうな疑いの様子。

物事のながれの中では そなたもやはり

私を思い出してくれるのにこれ以上のことはないでしよう——

松の中に隠れていた小さな谷間、

その谷に埋まっていた丈低い小屋は

樹木で囲まれ、樹木ですつかり覆われ、

ヒイラギ⁽¹⁾、テマリカンボク⁽²⁾、クロクワ⁽³⁾が一面に茂っていた。

九

というのも、君、我が友よ、こういうのは唯、美しく折り疊むものだったのだ、
宝石の花の周りを巻きつける葉は、
彼女の美しさに持参金の半分を附与する陰——

そこにある影を豊かにしたその美しさは

変貌させる能力を駆使してあらゆるものに触れるのだ。

戸口にいる番犬、村の学校、

丘陵にある村、ウル⁽¹⁾の丘陵……

そして汝、真珠の額をしたアウレニアは

世界中の人々から愛されて、全ての時間を

全ての思索を 汝の甘やかな王国で統御したのだった、

女よ！

ゆるやかに過ぎてゆく数週間というも、私の空想は彼女だけを捉えていた
くる日もくる日も、たそがれ時に夜明けの冷氣の中で、
長い月光の夜な夜なずっと、私は「ウル」のことを夢みていた
それで私の心は、その月日の半ばは闇の中にいた。

十

詩人の月光—— そうだ、愛があれば理性は
応えられる筈だから、尤もそれは 苦しい仄めかしになるが
野ばらは 悪意であるいは急けて台無しにされるより
自然に枯れた方が見栄えがよい。

その少女は 月下の花のように美しかつたし
穂かで善良で 友だちにいつも変らず誠実だつた
それでも本来の彼女ではなく、それほど完全でもなかつたのだ、
同類の者と結婚した—— 欠けるところがあつても良しとされた。
それでも かねてからの親密さが挫折することはめつたにない。
莢に収まつてゐる草の茎のようびつたり接したまま
君は尚近づいて軽く噛み、その胸に
舌先で触れ、その感じやすい部位を優しく撫で回す、
半ば放心したまま、しかし押し戻されたり

吸い込まれたりしないで 唇から弾き出される。

十一

もう一つ。空と陸地のように真反対なのを――

遠くかけ離れてもいるが、そなたの美しさが私の上で輝いている。
そなたの貞節な天国から下方へ屈んでくれれば

私はこの世のちかちか光る両手を差しのべよう。

私は嫌な奴で汚れているが、そなたは純白で神聖に秘藏されているのだから。
そうなれば一層いいのだ。ありふれた愛でないのが私たちの宿命、

半ばあやすような半ば無理強いするようなありふれた冷たい陰鬱状態にあつて――
だが 素早く、痙攣するように私たちは魂を打ち合わせて

生命の舞踊を踊り、新鮮な塩のように

騒然たる風となる。おお かくして私たちは
直ちに一体となつて 雲と海とを結ぶような
旋回する柱となるのだ!――知らないうちに互いに
近づき合つて、ゆっくりと同類となりながら
鍾乳石と石筍のように暗闇の中で逢つたりするのではなく。

それは叶えられた、——しかし〈愛〉なる辛辣な神は
何らかの誹謗に復讐するが如く
私たちを分けようもなく混ぜ合わせておいて 私たちに
骨折らせたのだ 実のところ何のために努力するのか
あるいは何故私たちは気の進まぬまま山かけるのか、誰が行くのか、
あるいは驅り立てられてなのか 駆り立てるのは誰なのか 分からないままに。
はつきりしない心を心に惹きつける無数の思わざる出来事、
眞実の心と心を押し分ける無数の手——

田 森 こういうものを私たちは全く意に介さなかつたし何も知らなかつた。
世間の驚異、それとない憶測、

雲集する憎惡の表情に次ぐ表情、人の心を搔き乱す眼まなこ、
唯、共に貫かれ、ピンで止められたのだ。全く私たちは一つだつた。
同じ矢を射られ射られて〔一〕
私たちは倒れたのだ パエディムス〔二〕とタンタロスのように。

届いたばかりのさざめく風の息吹き、

打ちつけ降り注ぎくる薄い黄色い房
そして足許や私の周り一帯に吹きつける
薄い黄色い房と糸、握り拳だ。

ひどく好奇心に駆られて 私はその この上なく軽いものに一つ一つ注目する。
しかしそれらはどこにあるのだろう 我が友人たちの美しく若々しい生命が
この活気のない木陰に春の瑞々しさを与えてくれたのだろうか。

なくなってしまった！ そしてあるのは涙と思い出ばかり、全ては去ってしまった……
運命が私からこういうものを奪い取りはしないし、〈死〉が剥奪するわけでもない。
しかし〈自然〉がここに新しい美を運んでくるのは

あるいはそなたがあの頃々の集まつてくるのを見るのは何時だらうか？
私は 尚生き残つてちかちか光つてゐる苔に気付き、
木々に触れ、飛び散つた外皮の破片を踏んでゆく——
だが 新たな目覚めが訪れるのは何時のことか？

十四

それで私に 私の冬の仕事が迫りに迫つてくる、
夜な夜な冬が 吹き溜りになつた扉を揺するのだが。
今、私は 粗探し屋でも友人でも誹謗者でも
賛同者でもなく いそいそとそれ以上を差し出すこともしない。

しかし 苜が芽吹いて垂れ下がった大枝をふくらさると
自生の雑草は房となり散房花序となつて群がるし、
夜明けの薄明りにアカフウキンチヨウの不満が鳴り響く時には
私にも何かをさせて欲しい——私は小心者ではあるけれど——
そなた 私の友人以上の人へ！——我が信奉者！ 恋人に！
突風は今は収まつて 辺りには物音一つしない——
俄降りの雲が窓ガラスにびよびよ模様を描いているだけ
遅れてくる足取りのように時の急ぎ足を、
時間のびゆんびゆん過ぎゆく音をチクタク刻む柱時計のみ、
我が友よ かの日々を待ち望もう、さもなくばもつと瑞々しい花々を受け取つて欲しい。
何か海にひたひた浸されることが、暗くなつてゆく海岸を
横切る何か星々の漂いが、想像力が、

十五

洞察力が、記憶が、畏怖の念が、そして最初にして最後の親愛なるニューアイングランドの本質が、あるべきなのだと——その目的は高かつたし、その仕事は首尾よく始められたのだ、いつもの窓から 朝陽に照らされる馴染みの小さなベイツガを眺めて注目した人について 話させて欲しい、彼が凝視している間に、殆どその心の中に理解できないほどの平和が入り込んでいったと言つてもいいのだから。

十六

私に何かさせて欲しい！——年月が経つにつれて、幾らかは幽かな成果もあがる、多くはないものの 私の最高のが、おそらく骨折りの記念碑は失われてしまつたが。しかし、そなた あらゆるものを与える人よ、私を沈黙に沈ませて、早めの冷氣で萎れさせて霜に焼けた真黒な姿になどしないで 私には霜への連射砲を！かつて私は家の脇で一本の木が雷に打たれて緋色になり、小枝の先々まですつかり引き裂かれているのを見たことがある、何とも不思議に思えたので私は立ち止まって考えたものだった、今は本当に五月なのかと、

これらはバイカカラマツソウなのか、それとも私が夢を見ていたのかと。
 しかしそれは立っていた、小屋の軒すれすれに
 芯まで赤く熟して 木の葉と秋の悲しさを
 ほんやり霞んだ春の日に振り舞いていたのだった。

六 口木口ヰ The Cricket

I

蜜蜂がブンブン鳴つていつもの花の上で柔らかな羽音を立てる、
 芝生から茂みから
 エゾゼミが陽の当るさなかに歌つてゐる
 一時間また一時間と
 各々に特有の吟遊詩人が住んでゐる、それで汝は 一日が終わらぬうちは
 虐待されたりはしない。
 昆虫の群がる中で一際激測たるその囁きは
 窪地低地の草の中では包み覆われて聞こえなくなる、かと思えば
 桧のそばでは大声になる。
 私が歌を歌うのに 接けを求める手があろうか?
 甘くややかなコオロギに。

II

午後は眠気を催す、横にならうではないか

辺りの小枝の下に、重荷を負った小川が
自ずからぶつぶつ咳き呻きながら流れ去ってゆく間に、
そして我らが吟遊詩人の喜びの歌に注目しよう
さあつと青くなつてゆく幽かな地平線の方を眺めながら。

あるいは庭の四阿では、
吊り下がつた緑の幅広い掛け布が格子状に組み合わされ

人の自由な出入りを妨げている。

ちかちかと通り抜けてくる光——

そこに艶のないホップ⁽¹⁾が現われて

花開いて欲しいものだ、ケシの暗い 眼の覚めるような花と茎に
消えた芳香が私たちの額の周りを強打して
感覚を麻痺させて眼気を催させて欲しいものだ、その間には
流れ落ちる水と 木の葉をはためかせてくる風とが

出合つて混ざり合い、

ぶつぶつ咳き混合し、

背後の空き地から、はたまたハンノキ⁽²⁾の密集地からは

少なからぬ幽かな音がシュー・シューと鳴る。
しかし、黄昏れ時になるにつれて次第に大きな音が
ひりひりしている房花 葉身 葉鞘から

川蔓の群がりから 立ち昇つてくる、

枯れ葉の堆積や干し草の山からも、
上に、下に、

風の一吹きのたびに

手元に、周りに、限りなく

海のように起伏しながら

痙攣の広がりが！

III

汝のきりつきりと啼く声が足許でやむのを聞く子供には、

と言つても 彼はやはり汝の声を聞いてはいるのだが その声がやんでも

再び生き生きとかん高く震えながら鳴り出すのを聞くその子には嬉しいことに

汝は陽の光を浴びて楽し氣に座り込む。

夜を愛しむものもある。あらゆる暗いものを運んできて

休息し沈黙する、それでも汝が私のところに運んでくるのは

常にあの、静止することなき〈海〉の重荷であり、

呻き続ける断崖、低く黒々と荒涼たる岩々なのだ、

こういう高台の内陸の野原を 私はもはや眺めることはないが
長い平らな海辺の波打ち際、荒々しいカモメ、

それにひっくり返つてくる波ときたら！

汝はまた 墓から曖昧な言葉を運んでくる、

薄暗い日に 喜びと苦痛を辛辣に思い出しながら
自分のことをもはや夢みてくれない人々のことを
夢見ながら歩く彼の許に、

すると全盛期の表情と笑いが再び戻つてくる、
幸せそうに日光に当りながら横たわつたり飛び跳ねたりする姿態は
今は唯、釣り合いが取れていないに違ひない顔を備えていて
拒絶であり深刻な分割であり

それに申し分ない涙、最高の空虚だ！

それで薄明りの静寂に佇む汝の詩人に

鳴き立てながら唇で触れて笑わせたり赤面させるなど叶わず

両手を揉み絞らせて心臓を愛と苦惱で乱し、
両眼を閉じさせて 口付けなど思うままにとは とてもいかなくするのだ――

IV

それで汝は いにしえの優雅な時代に愛されていたのだ

ギリシャが健全だった頃、

神と英雄は 汝の美しい音色に聴き入つていた、

汝が穏やかに動き回つてゐる

そこでは 長い草々がカユストロスの唇の縁を飾つていた、
長々と引かれながら、白鳥と船のちらちら光る帆を張つて

そして船と白鳥が

でなければそこは

葦笛を吹くエウロータス⁽¹⁾が走つていた。

あの低い震音が汝の微妙な横笛を

クセナファイルに教えたのだろうか。

その息遣いは穏やかだろうか。どうだろう。あのバッタは汝の紫の髭に黄金となつて鎮座していたのだろうか

おお　　ブサマ⁽⁶⁾テよ。

それとも汝は黙つていたのか

あそここのハンノキの間にいる牧神パンのことを嘆いて？

それで水辺で丘の辺りで

あの渴むするチリンチリンが静かな草の中で鳴るのか？

失われた森がアルカディア⁽⁷⁾の角笛に合わせて嘆き悲しんではいたが。

V

いにしえの〈呪術師〉のように――

水辺の枯れた雑草の間を探しては

掬い取つたのは、冷たい月光の下に育つ邪悪な植物とか

あるいはマンドレイク⁽⁸⁾やドルシニウム⁽⁹⁾で、

しかも彼の耳を両方共開いてくれた葉に触れたので

今では明瞭な声が　彼には聞き取れるのだ、

獣の叫びに、小鳥に、昆虫のブーンという音の中に――

私なら唯、汝の歌に汝の知識を見い出すだけかも知れなかつたのに――

あのさえする舌は

光のように大古のまま、年月のように戻つてくる。

だからもしかしたら私は

浅はかにも歌つたりしたが、汝を本当に解釈できるのかも知れない

汝の調べに全身を貫かれて心を搔き乱されてしまつたが

その時以前より一層健全な闇の中の更に深い静寂に浸つていたなら。

そうすれば私は世の中を

動かして 我が主にして立法者たる汝に

耳を傾けさせることが出来るかも知れない

そうすれば私も探求などしなくてすみそうだ、

汝の知恵を世間に知らせることで満足しよう、

最後に何らかの僅かな拍手喝采を得ることで満足しよう。

僅かになつたり消え失せたりしても

葉柄や茎の中の、あるいは飾られ化粧された庭の墓塚――

忍び寄る霜が

粉のようになりかかつたり真珠の玉となつたりして――の

苔むした石から聞こえてくる汝の声のように。

浅黒い虹の中のトウダイグサの美しさ！

というのも 大きくなればなるほど実際それだけ美しくなくなるだろうから、そして

夏草の中でやむことなく煮立つてゐる姿のようだ

風の強い野原や、太陽光線の当つている所で
無数のおびただしさの中の無の中であくせく精出す彼にとつては。

それで私がもしかして多く所有することになれば
それだけ多く与えなければならぬのだ。

しかしこれが駄目ならば、小さな谷に草深い堤、
水辺も荒地も依然として貴重であり

楽しい屋敷も住まいも全てがそうだ

そこでは汝は歌を歌つてきだし、私は知らぬうちに
聞くともなく聞いてきたのだった。

だから コオロギよ、汝の歌を歌つてくれ！ さもなくば私の歌に答えてくれ！

汝の歌は非難を囁くが、私のは褒め讃えることしかしなかつた。

それはまた大したことではない。見たまえ！ 秋が闊けてくると

影が増してくる、

瞬間瞬間が永遠を攫まえるのだ、

我々が立ち止まつては言い争つたり愚痴つたりしている時でさえ

我々の生命は喪失してゆくのだ――

この上なく薄つすらとした籠のように、

あそこで消え去つてゆく木の辺りの色のように、

喜べばいいのだ！ 喜べば！ まだ時間の在るうちに――

喜ぶか　さもなくば嘆くかだ、そしてこの世をぶらぶら播らせておこう

汝か私のことを歌うコオロギの歌にも心動かされることなく。

七 既刊ソネット五篇

十一月

おお！ 衰えゆく年の悲しい退廃を感じることもなく
巻かれた葉に書きつけられ 広く配られた
教訓を 依然として悲し気に恐ろしそうに見守つた人が
私たちの中に誰かいるだらうか。

今や彼方の森林地帯がもはや 病氣で輝きながら
枯れたりしなくなつた時に、木が燃えるような死んだ有様で
炎の頬を前に傾けて 姿れて西風の息の
暖かな流れの中に溶け込んで行かなくなつた時に、
またそれでも斜面や平原を低く這う青い霧の中を
赤い陽の光が一日の夢へと沈み込むこともなくなつた時に。
しかしそのような一時の風から変化の風はどうと吹いてきて
うとうとしている木の葉を 叩きつける雨で打ち碎いてしまい、
小さな森という森を振り動かし、咆哮し、それらを最悪の姿にしたので
遂に世界中がとげとげしくなり 冷たく灰色になつてゐる。

四月の最初だというのに！　まだ十一月の霜が
森にかかる。丘の青い頂てっぺんを霞ませている。

正午の光が砂地の路上に弱々しく

留まつて　落ち葉の散り敷いていた道を髪號とさせ
陰が死の鎮まりを見せ　柔軟な薄明の日々ときたら
冬が風のラッパを唇に当てんばかりだ。

苔にも擡たたかげる房が見られなくて恥しそうだし

草の下にも沈むはずの黄金の眼をした花はなく、
息づきの音も聞こえないが、たまたま南西には
幽かなざざめきがする、松の茂みの中に、
乾いてかさかさ音を立てる縮み上がつた葉叢はやうの中に。

密集した村があり、一筋の白線が

集まつて煙になつていた。この気のめいる想いを捉えているのは何だろう？
死んだ秋だろうか、夢みている春だろうか？

森　田　孟

ソネット

再び三たび、汝らは嵐めく悲嘆のうちに離れ去る、

この暗い丘陵地に建てられても無駄になつた四阿から
二度と動こうとしない唇と心臓から——

哀愁に満ちた秋と身悶えする木の葉、

東の間の予告だけで涙のうちに急にやんでしまつて、

風は物悲しい旋律を反復し、

天窓に休みなく雨を打ちつける、

水蒸気が山を水浸しにする、麓も頂も。

私は籠の中にくつきりみえる濡れた屋根屋根を見詰め

日除けに数珠繋ぎに連なる雨滴を凝視める、

すると私の心は血を噴き出し 私の五感の全ては悲嘆のうちに

うなだれる、苦惱に裏打ちされた穏やかな顔が一つ

思い巡らせていくうちに現われてくるので、おお激しく、雨と風よ、

そのまま悼み続けておくれ。彼女は眠つていて、君らの怨れる悲しみにも今や注意を払わない。

ソネット 一

昼の光と共に明るくなり 暗くなると

薄れてゆく星のような花、花のような星々、

私の目に幽かに止まる緑の中の、あるいは月桂樹で⁽¹⁾

一面に覆われたちかちか光る岩々の中のトキワナズナは

〈光の主〉、〈覆い付きランプ〉にとつてはもとより

私には あの、王冠を戴いた月や天国の偉大な司祭長に
劣らぬほど神聖な造化の妙だと思われる。

それは そうだが 目立たぬ草の中の花や 夜輝く火花も
やはり私の心を動かし 〈眞実〉を目ざして上昇させ、
探求させるのだ、新しいものを古いものの中の変化、成長、死を通して、
十分なものは殆どなく、もっと壯麗なものは尚少ないが、
苦痛に耐えるしかない。常に自らにこう言い聞かせながら、
彼の〈御手〉が、黄金を雨あられと降り注いで地面に触れて
真夜中の青空に 〈オリオン〉を点刻したのだからと。

ソネット 二

そういうわけで この偉大な天体はおもむろに方向を転じて
あの星々の奈落からその光に向かつてゆくかと思えば
日没の光の中を暗闇へと転がりゆくといった次第で
形と流れのあらゆる要素、及び生命の中の生命を備えていても
それでは王冠を戴いている良識ある王にも物が見えなくなるので
それは距離、進展、次元、及び程度に
世界同様やはり奥深い類似性があつて

とても知るいじの叶わない微塵を圧縮した唯の〈統一體〉なのだ。
 それと同時に、我々が世界と現に呼んでいた圓い地球は
 あの最も巨大なものが膨張するのだという意味で、一つの粒にすらな
 とこらの、その巨大なものを構成している微粒子が
 光の星の一つ一つであって、それは〈神〉が動き回って
 その足許に〈全て〉を踏みつけていた
 一つの無限の〈球体〉の究極の原子なのだから。

略註・註解

以下、本稿で言及・引用する参考文献は各々圓頭の記号の数字によるものである。

- B *The Sonnets of Frederick Goddard Tuckerman.* Ed. by Witter Bynner. New York: Alfred A. Knopf, 1931.
 B . a *Oxford Anthology of American Literature.* Ed. by William Rose Benét and Norman Holmes Pearson. New York: Oxford University Press, 1938. 2 vols.
 B V BROOKS, VAN WICK. *New England: Indian Summer.* 1865-1915. New York: E. P. Dutton and Co., 1940.
 B W BENÉT, WILLIAM ROSE. "Round about Parnassus," *The Saturday Review of Literature*, VII (February 7, 1931), 584.
 C CLARK, MARGARET TUCKERMAN. "A Hawthorne Letter," *The Yale Review*, XXIII (September, 1933), 214-15.
 O a *The Complete Poems of Frederick Goddard Tuckerman.* Ed. by N. Scott Momaday. New York: Oxford University Press, 1965. *大編の世界トヘイド。*
 E R EATON, WALTER PRICHARD. "A Forgotten American Poet," *The Forum*, XLI (January, 1909), 62-70.
 E B EBERHART, RICHARD. "A Quiet Tone From a Rich Interior," *New York Times Book Review*, (June 20, 1965), 5.

- GOLDEN, SAMUEL A. *Frederick Goddard Tuckerman*. New York: Twayne Publishers, Inc., 1966.
- GOLDBECK, ———. "Frederick Goddard Tuckerman: A Neglected Poet," *The New England Quarterly*, XXIX (September, 1956), 381-93.
- HOWE, IRVING. "An American Poet," *The New York Review of Books*, (March 25, 1965), 17-19.
- MARCUS, MORDECAI. "Frederick Goddard Tuckerman's 'The Cricket': an Introductory Note," *The Massachusetts Review*, II (Autumn, 1960), 33-38.
- MORRISON, THEODORE. "The Sonnets of Frederick Goddard Tuckerman," *The Bookman*, LXXII (March-August, 1931), 205-6.
- "Book Notes," *The New Republic*, LXIX (November 18, 1931), 26-7.
- BLISS PERRY, *The American Spirit in Literature*. New Haven, 1921.
- REDMAN, BEN RAY. "Old Wine in New Bottles," *New York Herald Tribune Books*, VII (June 7, 1931), 12.
- "A Contemporary of Lowell and Whittier," *New York Times Book Review* (May 24, 1931), 12.
- UPTON SINCLAR, ———. *An Anthology of the New England Poets from Colonial Times to the Present Day*. Ed. by Louis Untermeyer. New York: Random House, 1948.
- WILSON, EDMUND. *Patriotic Gore*. New York: Oxford University Press, 1962.
- WALTON, EDA LOU. "A Neglected Poet," *The Nation*, CXXXII (September 2, 1931), 234-35.
- WG Poetry of the New England Renaissance (1790-1890). Ed. by George F. Whicher. New York: Rinehart and Co., 1950.
- WYERS, YVON. "A Discovery," *The Hudson Review*, III (Autumn, 1950), 453-58. Review of *The Cricket*.
- WYERS, ———. *Maule's Curse*. Norfolk, Conn.: New Directions, 1938. p.125n.

第三輯

- I (—) bloodroot. 北米原産ケン科サニーベニア属の植物。根と樹液が赤く、单生の白花。
- (—) pearlwort. ハメクサ属の植物の総称。日本採用されしる作品。
- II (—) stramonium. <stramonium=jimson weed. もうひとつの呼ぶ名は「惡臭草」。ソリジットトヘ語の名称を使ひたのは、ソリジットトヘ語では「惡臭草」と云ふ意味で、したがゆゑに「惡臭草」へとされたのである。作者は植物の細部には厳密じ、詩や使へばは正確に、を心がけてゐる（G・H・100）。この作風は、次の出、六三三の幅対を成す（G・H・1）。

H (1) bitter weed.=*Helenium tenuifolium*. 他に、苦味を含んだ植物、ブタクサ (*ragweed*). ニメムカシモギ (*horseweed*)、タハカリキ (sneezeweed) なども指す。Uに採用されていく。

七 (1) hemlock. ハマツ型に成長するツガ属針葉樹の総称。

(2) pitchpine. マツヤニを採る松の総称。

九 (1) Saul. イスラエル初代の王。「サムエル記上」九・一一。

十

(1) mountain ash. バラ科ナナカマド属の低木、またはユーカリノキ。(1)は前者だらべ。この作品は、ロコロギの声だけの極端な静けさのうちに一人の青年の死を悼んでいる (G・九八)。その静寂が最後の三行 (Where the black shingles slope to meet the boughs / And, shattered on the rooflike smallest snows, / The tiny petals of the mountain ash.) の歯擦音で強調され、最後の語 “ash” [æʃ] は「ハッ」静かに一ふくへ歌謡になつてゐる (G・一〇四)。

十一 (1) mullein. カマノハグサ科モウズイカ属の植物、花言葉は “good nature” (氣立ての良き)。

(2) 一八三一年八月に、当時在学していたボストンの「チャーチス・ホール」校での年次行事の学生会で、十歳の少年タッカーマンは、コットンエバーの劇『ピサロ』 (Pizarro) の一場面でのペルーの老勇士オロシンボ (Orozimbo) の役を演じた。その回想である。「オロシンボもピサロも〈獅子王〉ではないが、から騒ぎ、激情、騒音に充ちたこの英雄悲劇で彼らがみせるあくどい修辞は、青年期の想像力から成るこの作品の数行【八—十四】に巧みに仕掛け取られている」 (G・二三三)。ピサロ (Francisco Pizarro, c. 1475-1541) は、スペインの軍人・探検家でペルー (インカ帝国) の征服者 (一五二四-一四二)。ロッフホー (August von Kotzebue, 1761-1819) は、ゲーテやロマン派と対立した、ワイル生生れのドイツの劇作家。ドイツの青年たちの自由主義思想を嘲笑して一学生に暗殺された。

Uに採用されている。

十三 (1) 大犬座 (Canis Major) の星。高級な天体望遠鏡を保持して天空を観察した作者の面目躍如たる作。自らを悲運な水夫に喩えている。

十四 (1) locust. 枝に棘がある米国産マメ科の木。この作品は、若い花嫁の突然の死に動搖する友人への悲痛な思いを描いたもの。作中の「ヒヤシンス」は、微妙な青みを帯びた赤い色で際立つユリ科ヒヤシンス属の球根植物だが、通常の “hyacinth” ではなくじの魔語の “the jacinth” が使われている。それによつて一層、纏わつて悲話の連想させる。この花はアポロンによつて誤つて殺されたヒュアキンストスの血から生じたとされている。この花の稀なる色合いは、花嫁の赤い唇と薄いバラ色の肌によく合い、この悲話が友人の悲痛に痛切さを付加する (G・一〇〇—一〇二)。

十六 (1) Agric. 「アルテミシアは存在しているように思われる。彼女は夫の遺骨灰を葡萄酒に混ぜて飲んだのだ。

が、アグリアとは誰だったのか。彼女は何を呑んだのか?」(W・四九三)

(2) *Artemisia*. キク科モギ属の植物の総称で月の女神アルテミス(*Artemis*)から派生しているが、直前のアグリアと脚韻を合わせるために用いられている。勿論この女神を指す。十四・十六は三幅対といふもので、悲痛に打ち拉がれた恋人の全くの無力感が、十六の最後で消えてゆく。(自然)の保持する治癒力を示そうとする。十六の最後の四行で涙が「神聖な一呑み」のための緩和剤となり「苦い灰」を可能にする。こうして「涙」は伝統上の陳腐な使用法を脱するのだ(G・一〇六)。

十七 (1) *sorrel*. ソバ科ギシギシ属の植物の総称、葉は酸味。

(2) *knotgrass*. ニワヤナギとも。タデ科タデ属の野原や路傍の一年草。

(3) *spurge*. タカトウダイ属の植物の総称。ポインセチアなど。

この作品から二十までの四篇は、人間と自然との関係を探求する。

十八 (1) *aphodel*. ユリ科のアスフォデル、ツルボランだが、これはギリシャ神話の中の、善良な死者の靈の住むアスボデロスの野に咲くと伝えられる不凋花である。

十九 自分自身の行動の価値と農夫の仕事との均衡に思いを馳せ、人間の行為は神によってのみ判断されるという考えを表明している(G・五四)。最後の四行は、神がヨブに話しかけているのであり、「ヨブ記」の敷衍である(G・三八九)。じに採用されている。

二十 (1) *Opheion*. 「」の名前は、ミルトンの『失乐园』卷十、五八一行に現われる。これがこここの典拠であることはまず確かだ(CP・一一)。人間が神へ抱く熱望と憧憬を自然是決して満足させてくれないと、いう信念を表明し、詩人に残されているものは何かと問う。この問いへの自らの答が二十一で、それは神の慈悲を乞うことだ、とする(G・五四)。

二十二 自然を強く劇的に拒絶するところは第一集のクライマックスだ(G・五四)。

二十三 友人の臨終を見舞つた妻の静かな威厳に充ちた姿を活写した作品である。

二十四 冒頭の「夢」とは前の作品「十三」のことを指している。二十四の主題は、人は疑いに直面するとしばしば夢や幻の中に眞実が啓示されるのを見ることが可能になる、というもので、書き出しの所ではつきり、疑う人は何故この可能性に抵抗するかを訊ねる。最後の四行で、その持てる幻視力で單なる理性に挑戦した五人の女性を列挙する(G・八四)。大膽すぎる名前このこれだけの羅列は欠陥だという印象も、彼らの正体が分ると、作品の主題を本質上強力に支持する引喩として十分機能しているとゴーレムは、詳細な説明をしてくれる。

(1) *Manoah* の妻と (2) *Deborah* 「紀元前一二五〇年頃のイスラエルの女子言者」は、バイブルに登場する偉大な幻視力の持ち主。天使がマノアの妻に息子を授かるだろうと告げた時、彼女はそれを寸毫も疑わなかつた。「その女は息

子を生み、サムソンと名付け、その子は生長して神が祝福し給うた」(「士師記」一二一・一四一—一五)。デボラは幻視によつてイスラエルは征服されないと信じて偉大な力を示し、事実そのとおりになつた(「士師記」四五)。

(3) *Actia*. オウディウスの『転身譜』では *Actaea*. もつと普通にはオーレイテュイア [Oreithyia] (アテネの王エレクテウス [Erechtheus] の娘) として知られる。北風の神ボレアース (Boreas) との試練の物語が纏わつてゐる。恐怖に戰くオーレイテュイアはボレアースにマントに包まれて空の彼方に運ばれ、凌辱されて野蛮な北国に棄てられる。その結果双生児のカライス (Caleus) とゼーテース (Zetes) が生れ、彼女はアテネから遙かに離れた所で、この二人は偉大な人物になるという自らの信念に支えられてその子らを育て、苦難に打ち廻つた。彼らは成人するとアルゴーの遠征に加わり、金羊毛を探し求める最初の船に乗つた。

(4) *Arlotte*. この正体は突き止め難い。しかし、スペイン王カルロス四世とバルムのマリー・リリイーズとの娘シャルロット (Charlotte) への引喩で “ch” を削除した新造語であろう。古めかしい香氣を生むためと、この作品に一層よく合うようにと柔らかな音調に変えられたアクティアと巧く調和する音にするために。シャルロットはポルトガルのジャン(一七七五—一八三〇)の妻になつた。彼女は一八〇六年に夫の許を離れるが、それは息子のドム・ミケル (Dom Miguel) がいつの日か父の権力に反抗して父を廢するだらうという幻視を得たからで、彼女は息子を激励したが、その陰謀は失敗し、女子修道院に幽閉された。

(5) *Mandane*. これの正確な同定はし難い。ヘーロドトスの語る話ではキューロス (Cyrus) の母 (別説では妻) であるが、作者は、偉大な幻視力を持つ女性の一例として彼女を選んだのだ。ヘーロドトスによれば、彼女は、メーティア (Media) 「約三百年間栄えて紀元前五四九年にアケメネス朝ペルシャに滅ぼされた古代王国」(現イラン北西部) の王女で、全世界を受け継ぐ子を授かると予言された。それを信じた彼女は、キューロスの勝利の歴史によつて信念を証明されたことになる。タッカーマンは幻視力を以上のように集中させて見事な詩の凝縮を達成させた(以上、G・八五—八六)。

『金詩集』の編者モマディの見解は、このソネットの最終行の三人の女性はいずれも支配者の母だとして、(5)はゴールデンと同じくキューロスの母だが、(3)は「まず間違ひなくアウグストス帝の母アティア (Atia)」(4)は征服王ウィリアムの母であるファーレーズのエルレーヴ [(アルレット)] (Herleve [Arllette] of Falaise) だと述べ、各々、エストニウスとマームズベリのウイリアム (William of Malmesbury) の文章を引用している (C.P. XXVii)。ゴールデンはモマディをさり気なく無視したことになる。

二十六 ページからの最後の三篇は、第一集全体の締め括りで、作者は自分が〈自然〉の耳を持つてゐるのだと考えたのである。

(1) *night-hawk*. アメリカ産ヨタカの総称。

森

田

孟

(2) sparrow. アメリカ産ホオジロ科のヒメドリ、シトードなどの総称。スズメ。

(3) catbird. マネシツグミ科の数種の鳥の総称。これらいずれもニューアイングランドに普通に見られる鳥。

[一十八] 第一集最後のこの作品は、神は全ての人々の安定・確かさの真の源だ、と主張し、人生の意味は神と共にあり、神は理性や自然によってではなく信仰の実践によってのみ到達可能だとして、三つの相が要約される。「知る」との苦痛は詩人に、「悲痛」は苦しみを経験した人々に、「骨折りの至福」は有用さと価値が分る野で働く人に、それぞれ所屬するのだ。このような状況下でこの詩人は、最後の五行のように内部の声が命ずるとおり、信仰に依存しなければならなくなる(G・五五—五六)。

この最後の五行には、ブリス・ペリーが超絶主義者たちを論じながら、理解と理性との葛藤について結論を述べる際に触れていて(一九二一年)[P・一一七]、イートンの論考(一九〇九年)[E]とピナー版(一九三一年)[B]との間でタッカーマンに言及された唯一のものと言つていい(G・一五七)。

第一集

一 (1) pokeweed=pokeberry. ヤマゴボウ属の多年草。高く伸び、紫色の液果をつける。根と実は吐剤・下剤の薬用、若枝は食用になる。卑俗な名称を取えて使い、「吐く」(spit)などと当時は無論、詩に使う語ではなかつた語彙を使つて、素朴なそして物憂い雰囲気を出したもの(G・一〇〇)。

第二集は、主として亡妻の追憶に捧げられたもので、若い妻に先立たれた後の無氣力な状態が、勤勉な少年農夫と対比されて描出される始めるのである。

二 (1) tamarack=tammarack の蔑語。北米産マツ科の針葉樹。OEDには“tamarack”的使用例として一八四二年のジエイムズ・フェニモア・クーバーの『鹿打ち名手』XIIIや、一八五五年のロングフェローの『ハイアワサ』Vii、48などが挙げられている。

この作中の「彼」は、語り手の「私」が自らを客観的に指して用いていると考えられる。用心深く殆どしぶしぶと(G・五八)、主題に近づいてゆく第二集は、牧歌風の序曲の一からこの作品の後半で、亡き妻の永遠の眠りと少年農夫の健康な眠りが対比され、次の三では語り手の悲しみは高みから燃えている我が家を見下ろしている人の悲しみに簪えられてゆく(G・五八)。

この作品の末尾の語は順にdeep, foam, home, weep, keep, doom, steep, room, showers, it, sleep, cone, pit, flowersで、A B B A A C A C D E A B E Dの型で押韻する。最初の八行は、「完璧に鋭い押韻で、安定・不变を示唆」(G・七八)し、「動揺した気分を、標準と標準を外れた押韻の組み合わせで伝える例」(G・七八)。

四 (一) brookflag. 未詳。“sweet flag”ならサトイモ科の多年草、シモウブ。

(2) tinder. 煙突焦がした麻布に硝石を混ぜたもので火打ち石の火花を捕えるのに用いた。

(3) Hephaestus. 火、鍛冶、手工業を司る古代ギリシャの神。

五 (一) Cascadna. 余り明瞭ではないが Cascade と mock から造語されたもの。カスケード山脈 (Cascade Range) [カリフォルニア州北部からカナダ西部にわたる山脈。最高峰はレイニア山 (Mt. Rainier, 4392m)] の孤峰の意 (G・八九)。

(2) cinquefoil. バラ科キジムシロ属の草、もしくは低木。ベビイチゴ、キンバイ (金梅) など五本の指に似た掌状複葉のものが多い。

七 (一) Hamilcar [Barca] (c270-228B.C.) ハミルカル・バルカス。カルタゴの將軍・政治家。古代ローマを悩ませた名将ハミルカルの父。

八 (一) whippoorwill-shoe. 五月に湿った所に、けばけばしく目立つ黄緑色の花を咲かせるランの仲間。白と深紅色の袋があく。

(2) sidesaddle flower. 瓶子草。北米東部原産の食虫植物。暗赤色の葉脈の緑色袋状の葉、六月初旬に豊富に沼沢に見られる。

(3) May flower. 北米東部原産、ツツジ科イワナシ属の匍匐性小低木で通常四月に松林に見られる。もとと一般にはハイイワナシ (trailing arbutus) として知られ、錯花色で地面をしつかり抱くようにして乾いた葉の間に隠れている。以上、作者の住んだバークシャーにも見られる花であり、これらの植物の自然の生息地はこの作中に非常に正確に描かれている。美は自然の到る所に存在するという考え方が表明された作品 (G・一〇一)。

九 語りの静かな調子が、この作品で突然毀れる。友人は兄弟を亡くし、作者は新たな子供の誕生を待っていたのだが、次の十で一層よく分るように、妻がその出産直後に赤子を残して急死する。一から九までのソネットは、作者が「妻の思い出に詩で捧げた記念碑」(G・五九)への入念な序で、これから愈々、子供の誕生と、その母の死、自分の境遇の変化、現在の悲痛の原因、理由、結果をはつきりさせてゆき、やおら希望の調べを導入し始める (G・五九)。

十一 (一) Whately woods. グリーンフィールド [詩人自身が住んだ町] の真南の森。

(2) furlong. 長さの単位、二百米。古くは鋤き跡の長さ。

十二 自作詩の吟味・点検をし、自信欠陥と自信回復の間の揺れを示している作品。

(2) amaryllis. ヨガンバナ科ヒップストルム属の球根植物の総称。

(2) haemanthus. アマリス科の植物。結婚の神 [ヒューメル (Hymen)] を想起させる名であると同時に “Haeman-

thus toxicarius”¹は矢毒を生ずるゝことを思ひ出させる (G · 101)。

(2) eardrop. もつと普通は “lady's-eardrops”²と呼ばれる。アカバナ科フクシャ属の植物。

(4) auricula. サクラソウ科。葉の形から「熊の耳」(bear's ear) と呼ばれる。

(5) girasol. 火蛋白石 (fire opal)。燃えるような反射光を発する。

花々の一覧表は、恋する人の想像力の奔放自在さを示唆する (G · 101)。

十四 妻アンナとの海边での忘れ難い日を回想した作品。ウイツチャ一 (WG · Viii) は、この作の最後の一行 (And white feet flying from the surging surf / And simmering suds of the seal) を、大胆に切り縮めた終り方だとして大いに注意を表明した (G · 三九一)。

十五 次の十六と対をなす作品で、妻アンナの美の二つの相を、美しい象徴を使って描いたもの。ゲルトルードには肉体の美が、グリエルマには精神の美が体現された (G · 五九)。

十六 (1) balm. シソ科の特にハッカ属の各種の芳香性植物の総称。

(2) feverfew. キク科の低木状の草。

この作品についてはY · ウィンターズが最初の四行は秀逸、次の三行はかなり良い、第八行は秀逸、第九行は最初の四行と同じくらいに良いが、第十行は感傷に充ちた紋切り型、最後の五行で十九世紀の詩の中でも最も美しい描写の一つを我々は保持することになるが、その二行目 (第十一行) で再び損われる、と細かい評価を下している (CP · X)。

十七 秩序正しく運行する水星、火星、地球、月の動きを、作者が自らの混乱した悲しみに関連させて考へる時、安定期という象徴が入念に作動させられている (G · 九四)。

十八 (1) Quonecktaut. 先住民の綴りを用いて、かつて彼らが徘徊していた時代の森の霧雨氣を維持する役を持たせた (G · 八九)。現在の “Connecticut” (コネティカット) 川は、ニューハンプシャー州北部から南下してロングアイランド水道に注ぐ、長さ六五〇キロメートル。

十九 (1) 十六世紀に発明された大口径の歩兵用滑腔銃でライフル銃の前身。

(2) The Hessian. アメリカ独立戦争時に英國が雇った、ドイツのヘッセン州の人。

(3) Daniel Shays (1747-1825). アメリカ独立戦争時の軍人。マサチューセッツ州で起きたシェイズの反乱 (Shays' Rebellion, 1786-87) の首領。独立戦争後、奥地の小農たちが紙幣所有階級に不満を爆發させた武装反乱。

(4) Shaug or Wassahoole. 「ディアフィールド大虐殺」 (Deerfield massacre, 1704) 「トイアフィールドはタッカーマンの住んだグリーンフィールドのすぐ南にある町」。そこをかつて襲撃した先住民の酋長たち。ソノワソウ暴力事件と作
者自身の変化とを調和させるのは困難だと語り手は悟るのだ (G · 六〇)。

二十一 (一) windflower. キンポウゲ科の小さな多年草。白色やしづかピンク色がかった花をつける。北米原産。

二十二 (一) の作品と次の作品とは、妻が自分から離れて海へ運ばれてゆくのを夢想し、彼女に離いてゆきたいと希望。二十二から二十五までの四篇をコールテンは、その繊細さと威厳の点でこれらを凌ぐものがない、有効で敏感で痛烈だと絶賛する (G·一·三八九)。

二十三 この作品と次の二十四とは、主題を比較して扱っている。人間智の源の両極を示す」とで、源は眞実を啓示しないという基本の主張を強調した (G·一〇六)。

二十五 (一) Iocesius. 「嘆願者」が原義のギリシャ語からか。嘆願を聞き届けるというゼウスの属性を示す形容詞にもなり、「嘆願者」の意になる。

悲痛に打ち抜がれているまではいけないと気を取り直し始めはするものの、二十六、二十七と、語り手は、内面の平和へ到る道を見い出せずに無関心と倦怠に迷い込み、人生に前向きの目的を見い出せないものの敗北は受け入れないで、亡き愛妻の激励の声を心に聞き取りながら、徐々に衰れむべき状態から脱け出し、二十八では自らを長い病氣から抜け出さんとする病人になぞらえる。

二十九 (一) vervain. =verbena. クマツヅラ属の赤、紫の花の植物の総称。

少年期の回想が歌われる。

三十一 コオロギが死と破壊の象徴として使われる。

三十二 最初の一行 (O for the face and footstep! woods and shores / That looked upon us in life's happiest flush,) は、作者タッカーマンの墓石に刻まれている。

三十三 二つの生靈の存在を語り手は感じている (G·六一一)。

三十四 (一) Bedras. エストラス書。聖書外典の最初の一巻。エズラは、紀元前五世紀に活躍したユダヤの祭司・律法学者で、ネクモヤと共にイエルサレムでユダヤ教の基礎を築いた。

三十一から三十四までは、語り手が自らの悲しみを十分に表現したもので、この作品は直前の作品で語り手に力を与えて消えていった幻影と、恐れは愛によつて征服されたという確信に対する評価になつてゐる。彼は自らの「絶望の沼」を首尾よく横切つたのだからと自信を得て、アンナについての自分の考えはすっかり變つて讃美されたのだから幸福を再び追求してもいいのだと主張する (G·六一一六三)。

三十六 この作品で表明される、ようやく涙ぐましい努力で勝ち得た自信で、第二集は終る。この作品にみられる自信、自信、平穏さは、感情の点で語り手が得たいと望んでいた樂觀主義の表明になる故、第二集を締め括るに適しいものだ (G·六三)。

三十七 この作品は、草稿でもビナー版（B）以前の全ての版でも番号が付いていなかつた番外作で、自らに与えられたと感じる新しい生命に対する感謝と神に第二集を捧げようとする反歌、收め口上である（G・六三一六四）。

(1) *Eponina* プルタークその他による、紀元七〇年「ローマ最大の円形劇場コロセウムを建設した皇帝（在位六九—七九年）ウエスパシアヌス（九—七九）の時代」にライン河畔で起きたチヴィリスの反乱（*Chivilis revolt*）に参加したユリウス・サビヌス（Julius Sabinus）の妻*Eponina*。その反乱は失敗し、サビヌスは自宅に火をかけて洞窟に避難した。彼は焼死したものと思われていたが、実は九年間洞窟で生き延びた。密かにエボニナは夫を訪れてこの長い潜伏生活の間に彼の子供を二人生み、その子らは父親と共に洞窟暮らしをした。結局この家族は皇帝の兵士に発見され、サビヌスは死刑を宣告される。エボニナは夫の命乞いをするが容れられず、彼女も夫と共に廻刑された（C.P. XXXVII）。ゴールデンは更に詳細にこの故事を紹介して、エボニナはエピノーネ（*Epinome*）をタッカーマンが柔らかな音を作り出すために母音を変えたものであり、子供らも双生児だという。彼らは一説によれば容赦されたが、作者はこの悲話を利用するに際して、エボニナが子供らの命乞いをすることにし、その努力も無になつて彼らも殺されたという結末にした。エボニナが皇帝の心を動かすために子供たちを初めて洞窟から連れ出す瞬間に詩人は選んだのであり、このような注意深い選択によって引喩に焦点を当て、エボニナの悲劇を読者の身につまらせることだ。

タッカーマンの詩とエボニナの子供たちは、共に悲しみのうちに生れた子孫であり、闇の中に留められていたという点で同類になる。この瞬間に、エボニナの子供たちとの作品は闇から光の中に現われる。エボニナが皇帝に救いを乞うようになつてこの詩人は自らの言葉が神の「救し溢るる愛」“pardoning love”的うちに好意を見い出せるようになると希うのだ。子供たちが洞窟に九年間も「埋もれて」いたという発想は容易に自然に作者のソネット群が長年「埋もれていた」とこと繋がり、この連想は妻アンナも「埋められて」きたという作者の中心の思いと結びつく。この作品はエボニナで始まりエボニナで終るが、「彼女は詩人自身の苦境と大層絡み合わされたので、彼の個人感情は古い歴史上の事件の悲嘆と微妙な均衡が取れており、この両者は互いに光を投げ合い、この作品は二人の心の闇を照らす篝火になる」（G・八〇一八二）。

尚、エドモンド・ウイルソンは、エボニナは詩人がどこから作り出して、彼女の物語がアンティゴネーやエステルの話と同様に馴染み深いものみたいに言及すると述べ、第三集冒頭作のダゴラウス、ウイア共々、こういう記録に残つてない作中人物たちは、グリーントフィールドに隠棲中の作者と共に実際に生存するようになつたものだと想像され、彼らについて作者が読んだのか否かは何ら重要な事柄ではない、と記している（W・四九二一九三）ことにゴールデンは注意を促している（G・一五九）。ウイルソンはその後、同書のギャラクシー版（一九六六年）で注をつけて（W・一）、ゴールデンからの教示があつた旨記している。

第二集

(1) balsam カンラン科ミルラノキ属の木から採れる芳香性含油樹脂の総称。それを滲出する各種の木。

(2) Dageraus Wheare. [一六二二年十月一六日]にオックスフォード大学の近代史の初代教授に任命されたDegrory Wheare (1573-1647)のこと、「彼の手法」とは彼のラテン語の論文「歴史を編む理論と方法について」で、一六一三年にオックスフォードで発表された。かつては大変有名だったので Edmund Bohun の英訳が出て三版 (一六九二、一六九八、一七一〇年) 重ねられた。詩人はこの知られる教授を、その名前が疲労・倦怠感 (weariness) を示唆するのと彼の著作が長く忘却のままになつていたために選び出した。この「哲人」とその著作がこの本の核になつて、荒涼たる日々の自身の物悲しい感情を再生させる。名前の変更はこの作品の物憂い雰囲気を高める) ことになる。Dageraus は dagger (短剣) の穢やかな地図になつており、こういう本はその日を殺し (暗つぶしを) 精神を麻痺させる、というわけで、引喩によつて表面の意味が示す以上のことを表出することが可能になる (G・八一-一八三)。

〔一、三〕〈自然〉の奥深さへの洞察と〈自然〉への信頼を表明する。〔二〕は「彼」は語り手自身を、「そなた」は妻を「汝」は語り手が自らに呼びかけたものだろう。

四 (1) wood fern オンダ属のシダの総称、ベニシダ、イタシダなど。

(2) pitch pine. ヤニを採る松の総称。

(3) curved sail needles. ピナー版の校訂では “curve'd sail needles” だが、それでは「風の中で帆のように曲げられている松の葉」の意になり、「帆を縫うために使われる針のよつに曲がった松の葉」というタッカーマンの意図とは異なつてしまふ、とガールデンは適切にも注意している (C.P.・四二)。

五 (1) Common=Boston Common に間違ひな。

(2) (池) も埋葬地もトレモント通りとボイルストン通り (Tremont and Boylston streets) の角にあり、作者自身の少年時代の家の近くだつた。親しみ深い場所も子供の心の中では恐るしげなものになつてゐる) と示してゐる (G・八八)。

六、七 〈自然〉に深く親しみながら、それと心中で対話しながら、亡き妻との思い出が続く。

八 次の九と共に、自分に取り憑いてきた疑いと怖れを心から追い払つた静かな自信を要約する作品で、今や語り手は、人は忍耐と洞察を得るなら物事は全てしかるべき所に落ちつくものだと覺るのである (G・六五)。

十 語り手は、自分の考えがまだ中途半端で心も楽しくない状態だとは思うものの、怖じ氣づいたりせず、岩のようにつと耐え忍んでいる自分に気付いてゐる (G・六五)。

十一 (1) Long Island. ニューヨーク州南部の島。その両端にニューヨーク市のブルックリン、クウェインズの二区がある。一六一四年にオランダ人アドリアン・ブルック (Adrian Block) が命名した。タッカーマンが休暇を過ごすお

氣に入りの地で、地方の民間伝承を訊いて樂しんだ (G・115)。

(2) ジョン・バニヤンの「天路歷程」(John Bunyan, *The Pilgrim's Progress*, 1678, 1684) の主人公。この寓話物語を真似て、「幸福ジャック」Happy Jack 以下、居合せた人物を順に、「Rejoice」, "Red Ike", "Legality" と、作者が名付けたもの。(炉床) Fire Place 以下は "Devil's Neck", "Good Ground" も、土地に付いたる名称。

(3) Mount Sinai.シナイ半島南部の山。伝説ではモーゼが十戒初め諸律法を授けられたとされる。一一一八五メートル。この作品からの四篇 (十一～十四) は脱線した一つの完全な連作で、作者は独立させようと一度は考へていたことが草稿から判るが、結局は第三集に組み込んだ。おそらく一貫した重要な主題の発酵素として (G・六六)。だから脱線ではなく、この作品集で示されるような感性を作者に育んだ土壤を示すためのものだつたであろう。それにしても本稿の筆者には直ちに、ロバート・フロスト (Robert Frost, 1874-1963) の、ブランク・ヴァースによる対話詩の代表作の一篇「作男の死」"Death of the Hired Man" を發見させられた。同じニューヨークランド出身の二十世紀の国民詩人の、第二詩集「ボストンの北」*North of Boston* (1914) に収録されたこの一六六行の長詩の主人公はサイラスであった。次の十二の主人公と同名である。フロストの短い抒情詩の幾篇かはタッカーマンに似ているが、彼もそんなに早い時期にこの詩人を讀んでいないことは確かだ」とイーヴォ・ワインターズは指摘している (C.P.・xii)。尚、ウイター・ビナーが一九三一年の編著 (B) をロバート・フロストに贈つたら彼から、このソネット群には「盲人なら指で探し取れそうな高級な詩行がある」という簡潔な評言が返ってきた旨、ビナーからのゴールデン宛て書翰 (一九六三年九月三〇日付) にあつた (G・一四三、一六三)。

ロングアイランドへの旅はこの作者にとってはバニヤンの巡礼のようなものだったことが奇妙な、寓意を表わす地名から想像される (G・八九)。

十三 (一) loon. アビ属の水潛り鳥。

十四 (一) Pitherbooth. 未詳。

(3) Visgrade. ハンガリー中部の町 Visegrád の変形。一〇〇〇—一三〇〇年に牢獄と砦が存在した高い岩から見降ろされていた町 (G・八九)。

十五 神への信頼を宣言した作品 (G・八六)。この詩の核心は、「私はよみがえりであり命である。私を信ずる者はたゞ死んでも生きる」(「ヨハネ福音書」一一・二五)の書き直しであり、それを六行目のように変形した挙句次の二行「それは慰めたり……警告だ」で評釈した (G・八七)。作者が手に入れたあらゆる確信を一つの英に収めたのがこの作品で、内面の安定と勝利を素直に表明するのだ、「死や非常に恐ろしい責任も/私は今夜は殆ど懼れないか全く感じも

しない」と(G・六六)。

第四集

この一連の十篇を支配するのは、作者の知性面の強力な進展ぶりで、彼は実質上自己懇惑から脱却し、思索・靈感・(神)の広範に纏れ合い相剋し合う領域を更に探究し図示する段階に到つたのだ(G・六六)。

三死は休むことなき夜警だと見、神の機能を考え、その力に頼るうと、作者は自らに言い聞かす。一二行目の「雲、風、木の中で」は筆者に、カーソン・マッカラーズ(Carson McCullers, 1917-67)の短編「木、岩、雲」「A Tree, A Rock, A Cloud」を想起させた。

四(1) *Antigenidas* ギリシャ語の語源からは「異種の、敵対する」「生まれの」(者たち)となろうか。「敵対者」の意の作者の造語か。具体的な人名としては未詳。

この作品は、自分が一日ぶらぶらして過してしまつことを何とか正当化しようという良心の声の形象化である(G・一・三八八)。汝、汝と自らに呼びかける声は続く。

五最後の行の「人ととの貴重な仲間としての助力」という考えは次の六、七へと続いてゆく(G・一〇五)。

六(1) *Jobs Coffin.=Delphinus (The Dolphin)* 海豚座。

(2) *Golden Yard.* もうと親しい名称は“Golden Yard-Arm [桁端]”。オリオンの帶(オリオン座の三つ星)

(3) *moonstars* 不詳(G・一・六〇)。月のない夜最もよく見える天空の群を、九箇の月星が形作るのである。星をこのよくな親しみやすい素朴な名で指すことは、純粹に科学的な名称では叶わない暖かみと親しさを星に与え、こういう知識を与えて少年は「空を愛する」ようになれる(G・九五)。

(4) *Circle of the Bestiary.=the Zodiac* 黄道帯、獸帶。太陽の軌道である黄道を中心に、南北に各幅八度で広がつている想像上の球帶。古来これを十二等分してその各々に星座を配して黄道十二宮と呼んだ。

この作品は切れ目なしに次の七へと続いてゆく(G・七八)。これと次の作品の二篇しか南北戦争の渦中を生きた作者に、関連作品はないが、六と七は対になつて、丹誠こめて育てた息子を戦死させた老人の悲痛な思いが、戦地からの息子の手紙を一通(?)とに重さを量りながら読み返す彼の姿と共に読者にすつしりと迫つてくる。

八(1) *hamatite=hematite* へマタイト、赤鉄鉱、血玉髓、血のような石。

(2) *d'Acunha's Isle* 南大西洋の「トリスタン・ダ・クンハ」(Tristan da Cunha)。但し「膨大な雑草」「巨大なシダ状の葉」から確認される「サルガツツー海(藻海)」からは遙か北に離れている(G・八九)。

九 (1) グリーンフィールドのジョージ・D・ウェルズ (George D. Wells) 大佐。森をよく一緒に散歩し、作者が「川の神」と呼んで尊敬していた。「彼は一八六四年十月に、サウス・シーダー・クリークで戦死した (G・四三)」。タッカーマンは、四行十九連の追悼詩『G. D. W.』を書いた。先住民の族長と文明化された白人とを結びつけて一つの句にして親友に敬意を表し、先住民の窮状をそれと認識して、自然が侵害されて自分も先住民と同じように新たな土地を求めるを得なくなつたことを訴える。この引喩で、自らの主旨を読者の胸に迫るものにした (G・八三)。

十 (1) barberry. ヒイラギナンテン属の低木の根茎の乾燥物で強壮剤。メギ属の低木、特にヒロハヘビノボラズ。ツマトリソウなど。

(2) chick-wintergreen star.=star flower. 星状の花をつける数種の草の総称。ユリ科のオオアマナ、サクラソウ科の

自然の働きを観察し記録するのが自分の眞の仕事だと信じた作者が、自然への愛と知識を自分と共有してくれと心から誘いかけるのであり、作者の自然への敬意が総合されている作品 (G・六七)。

第五集

最初の三篇の主旨は、自然のやり方は人間の理解を越えているし、その活動を理解するには神の助けが必要だ、自然の必然性というのは神の「創造と権威」を通して働くのだから、というもの (G・六八)。

二

(1) night-heron. 夜行性。

もし人間が忍耐強く自然を細かく観察できるなら、遂には自然が足許で活動しているのを見る」とが可能となるう (G・六八)。

四 タッカーマンは独自の天文学徒だったので科学知識を尊重したが、科学では天空の壯厳な恐怖に満ちた働きを説明するには不十分だった。この作品で彼は、天空を探究した上で、科学者は確かに価値は高いが蒼穹を十分に評価することは出来ないので結論づける。七行目の「偉大な天使」の正体は「詩篇八・三・四」「私はあなたの指のわざなる天を見、あなたが設けられた月と星とを見ています／人は何者なのであなたはこれをみ心にとめられるのですか、／人の子は何者なのでこれを頼みられるのですか」にみられる (G・九四)。

五 (1) James Bruce (1730-94) 英国の探検家。ブルーナイルの水源を発見した (一七七〇年)。

作者は科学者の仕事に思いを凝らした挙句、自らの仕事にも同等の価値を見い出す。科学者も詩人も自然を探究するのだが、方法が異なるのだと。前者は「活力に満ちた足取りで自分の進路は真理の裡に」あると看做し、後者は「峨々たる岩を峨々たる岩に」付加することで真理へ向かうのだ (G・六八)。

六 (1) Sybil 占・予言を行なつた古代の巫女。

次の七と共に主題は知識の誤用についてで、説教と講演を聞きにゆく「一つの経験が語られる」(G・六八)。タッカーマンは隠棲していたが、講演を旧友と聞きに行くなど、地域社会との関わりは保っていた(G・四七一四八)。

七

(一) Nine Partners. ギリシャ神話の九人の学芸の女神。

八 次の九、十と共に三部作を成し、その基本觀念は、美の存在はありふれたものと移植不可能だからといふもの(G・八九)。

(1) holm.=holm oak 欧州の普通の常緑 oak トキワガシ

(2) ople.=witch-hazel (北美東部原産マンサク属、アメリカマンサク)

(3) sycamine. sycamore の変形で「ルカによる福音書」一七・六にみられる。以上 (G・九〇)。

この最終行は "With holm tree, ople tree, and sycamine." で、単純な破格、放縱と思われるものを含んでいて、ウイルソンもビナーモ、作者は「」で一種の言語遊戯に興じてゐるところを見ている。holm=home, ople=apple, sycamine=sycamore +mine で、詩の詩の鄉愁の調子に適しい内包を有している語だと。しかし實際は皆実在の木々の古称で、holm はアンケロ・サクソンの holm (=holly), ople はハーベン語の opulu (=guilder-rose [手毬肝木—スイカズラ科ガマズミ属のカンボク] の一変種、実を結ばない白色の花が雪玉状に固まつて咲く) もしくは walter elder (上に同じ)、viburnum opulus)、sycamine は馴染みのある black mulberry (クロクワ)。以上は (C.P. X XVIII)。拙訳はこれに依った。

ビナーモは「」の一形の豊饒な音は、エルムとホウム、アップルとオウバル、シカモーとマイインの組合せに依るのであり、この言葉の氣紛れだが實際に情緒に富む使い方は、エドガー・アラン・ポウも羨望おく値わざるものだ、と絶賛した(B・一八一十九)。ウイルソンは、「」の、人付き合いをしなくなつた詩人はジョイス流に言葉を遣つたようだ、"holm tree" は辞書に見つかるが "ople tree"、"sycamine" は見当らないと述べた (W・四九三一九四) が、その両方とも Webster's Unabridged Dictionary (1890) には載つてゐる (G・一六〇)。

九 (一) Ule. 神話に出てくる居住可能最北地の "Ultima Thule" の最後の音節から派生させた想像上の村といい決めてはならない。この詩人の作品の地名は全て実在のもので、八に出でくる庭の小屋も細つそりした少女もノルウェー南東の村「ウラ」"Ula" に見られるのかも知れぬ。Lippincott's Gazetteer (1952) には、「ウラ」はある高い丘の麓の夏の保養地だとある (G・九一)。

ウルが実在の地だとなると、「」の三部作は遙かに豊かな質を帯びる。美的象徴が強まり中心主題が具体性を一層増すことになる (G・九一)。八の夢みるような鬱閑氣から九の現実へ動いてゆくことで、十で優雅に力強く深入してゆく馴染みのイメージの準備がなされた (G・九一)。

十 野バラは悪意や怠惰で台無しになるより、自然に枯れる方が見栄えがよい、と主張される。しかし最後の五行で、神秘に満ちた場所という錯覚が、非常にありふれた心象で人々にされる。この心象は、先立つ二篇のソネットの調子とは合わないが、こういう目障りな併列による衝撃も、作者が實際には存在しないロマンスの小世界に読者を誘い込んだのだ」と判つた途端、消失するのだ(G・九〇)。最後の五行は、全ソネット中でも最もなまめかしい、當時としては贅贋を買ひうる、それだけに現代性に富む美しい箇處である。「少女」は妻、「君」は作者自身であり、かつての今は亡き妻との愛情の日の回顧・幻想であろう。

十一 whirling pillar. 「出エジプト記」一二・二一の「雲の柱」「火の柱」が想起される。前作同様、妻との愛情について語られる。鍾乳石と石筍のイメージが見事で印象深い。

十二 (1) Phaedimus.=Phaeidimus. (2) Tantalus. 「これはあの、我が子ペロップスを殺して料理して神々に供した罪で冥府の最下に繋がれたアリュギアの王の孫。オウティディウス『転身譜』卷六、二に現われる物語で、この不幸な二人の若者は、一日の馬術の稽古のあと戯れに取つ組み合いをして、アーポロの矢に射抜かれて二人一緒に同時に死んだ。この迅速な悲劇の神話と、妻と再び一体になりたいという作者の希が対比される(G・八三)。自分と妻を永遠に結びつけるために死という觀念を探究したのだが、この引喩は、人知では測り知れない力の存在を示し、作品の主題の普遍性と人間は自らの運命を支配できないことを例証することでこの神話は機能を果している(G・八四)。

十三 この作品以降は最後の四重奏で、生命を越えた永遠の確かさの意味解明へ向かつてゆく(G・六九)。

十四 (1) corymb. 下にゆくほど花柄の長い多数の花が頂上では平面状についている花序。最も外側の花から咲き始める。

(2) red robin=scarlet tanager. 赤鳳琴鳥。ホオジロ科の小鳥。

十五 最後の十六と共に、「私に何かさせて欲しい!」と叫ぶ意欲を示す。

妻アンナを追悼する出発時に初めて現われた、雷に打たれた木という心象【II・十、「三行目】は、五集一〇六篇に及ぶ一連のソネット群の掉尾を飾る作品にも登場して、この詩人の全生涯に適しい象徴となる。この鮮色の木同様、彼は自分の人生を巨大な悲嘆の赤い傷に変えた力の猛威に耐え抜いたのだ。共にそれぞれ、生きる意志の印として可能な限りのものを他に与えながら生産力を持ち続けた。困難を克服したのだという作者の主張は、自分の詩作がよく生きた人生の証拠だと自ら見ていることになる(G・七〇)。

六 ロオロギ

(1) hop. クワ科カラハナソウ属の多年性蔓草の総称。

(2) alder. カバノキ科ハンノキ属の木の総称、樺の木、山野の湿地に自生。
 (3) Cayster.=caustros. オウイディウス「転身譜」卷二・一・二五三、卷五・六・三八六で言及される小アジアのリュディアの白鳥で有名な河。

(4) Eurotas. スバルタ市のあるラコニア地方の主河。

(5) Xenaphyle. ギリシャ語からの遺語か。「クセース」(異邦の、客の)と「アユレー」(部族)の合成語とすれば「異邦人のみの部族」あるいは「客を持て成すのを好む部族」の一人を表わすか。

(6) Psammathe.=Psamathē. 夢の挿話に現われるプサマテの不幸な物語は、作者の心の深奥部への洞察を与えてくれる。その物語は彼の詩と悲しみを想起させる暗示に富む。プサマテは父の怒りを恐れて、アポロンとの間に生れた我が幼児リヌス (Linus) を山野に晒す。その子が野犬に食いちぎられて彼女は悲嘆の余り母親の本性を現わす。我が子を悼む彼女の挽歌は有名なりヌスの歌となり例年の儀式となつた。夢の領域では、思考がと切れ、順序が論理に合わない場所があるのかも知れない。多分リヌスはタッカーマンの詩だ、あるいはプサマテは妻のアンナを悼む詩人の悲痛を示す混合した心象であり、リヌスは天逝した息子エドワードを思う苦痛に満ちた幻だろう。エウロータス河の葦、横笛の柔らかい音色、プサマテの悲歌は、牧神パンの死を想起させるのだ。作者やコオロギ同様、パンは甘美な調べを奏でていられた森、茂み、山野で最もくつろげたのだ、とゴールデンはこの辺りを解釈する (G. 一二〇)。

(7) Arcady.=Arcadia. 古代ギリシャのペロボネソス半島にあつた高原。牧歌風で平和な桃源郷という伝説で有名。

(8) mandrake. ナス科の植物、麻醉性の有毒。多肉質の根が二つに分かれていて人体を思わせ、地面から引き抜かれる時に叫び声を出すと謂われた。媚薬とする俗信もある。

(9) dorycium.=dorycnion. ブリニウス『博物誌』二二・三一・一〇五、二八・七・一一、他にヒルガオの一種となる。毒草。

(10) euphoria. ニシキソウ、タイゲキを含むトウダイグサ科の植物の総称。

この作品は一九五〇年に発見されて、マサチューセッツ州のカミングトン出版所から一九〇部印刷されて初めて世に出た。その唯一の書評であつたイーヴォ・ワインターズの「おそらく十九世紀アメリカ詩に比類のない最上の作品」(WY) だという見解にも拘らず読者を殆ど惹きつけず、文学史上に位置を確保できなかつた。

その十年後に、モードケイアイ・マーカスが、「詩の爱好者とアメリカ文学の学徒への奉仕」と称して、タッカーマンのノートに記されていた鉛筆書きの草稿を字句どおりに、カミングトン版に付載されていた正誤表を考慮の上に印刷したものを公表して、その序注 (M・三四) で次のように述べた。この作品は、一見奇妙に古めかしく、人工的で曖昧模糊と

してみえるが、実はそのようなものではない。現実のでありながら象徴に富む生物や風景、及びそれらに触発される感情を捉えるこの上なく具体性のある言語でタッカーマンは、交響曲風の通走曲のような構造によつて、微妙に変化する主題と調子を示すと共に、人生の挫折を終らせるのだという死の訴えと格闘してそれを拒絶することを明らかにする。この格闘が生み出す緊張は、死が人生に投げかける闇は勿論のこと輝きも露にし、感覚に訴える。知性の高い、情感豊かな弁証法によつてこの詩は読み返されるたびに深まる経験を与えてくれる。この作品には、多分最初の動きが遅すぎること、言語が時々平板・陳腐なこと、統辞上の混乱など欠陥はあるが、最初は不適切だと思われたものもそれに更に一層馴染んでくると、適切な仕上げにみえてくるのだ、と行き届いた鑑賞を披露した。

本稿が定本としたモマディイ版は、更に幾通りか残っていた草稿を校訂した上のテクストで、句読点はずい分異なつてゐるが、詩句の違いは次の二箇所——マークス版の“tittering”と“shimmering”がそれぞれ“laugh and”と“glimmering”になつてゐる——だけである。

ワインターズは件の書評で、「コオロギ」は「海辺の墓地」[Paul Valéry, "Le Cimetière Marin", 1920]、「日曜日の朝」[Wallace Stevens, "Sunday Morning", 1915, 1923]、「死観」[W. C. Bryant, "Thanatopsis", 1817]と共に、十七世紀以降に書かれた死についての偉大な瞑想詩であり、これによつてアメリカ文学史は大幅に書き変えられる要があるし、同時期の英國詩でこれに匹敵するものは殆どないだろう、止まで絶讀した(W.Y. 四五八、G. 一四五)。最晩年になつてタッカーマンが、知力・精神力を再び結集して詩による自伝に終章を付け足したのがこの作品であり、生命の価値から生ずる幸福を最後に確認して意味なき死を拒絶したことの証拠であり、暗い疑い・不確かさ・絶望に対する作者の勝利を示す(G. 七〇)。

「コオロギ」は、作者がソネット群の中で客觀性を保つて細かく觀察した自らの人生を時空を漂いながら概観した夢の作品であり、ソネット群を支配していた不気嫌、優柔不斷、恐れ、疑いとは対照的な静かな自信に満ちた調子、寬いだ、緊張のない雰囲気、長く回顧する視点を特色とする成熟を示したもの(G. 一〇八)。ゴールデンは順に丁寧に読み解きながら、この作品は作者が、單純に叙述する詩(第一部)、深い情緒を示す詩(第二部)、極彩色の輝く心象と引喻を展開する詩(第四部)と、様々な詩の發話法を修得してそれらを統合する能力を保持していたことを示すものであり、子孫に何かを残したいし人生の本質の意味を少なくとも垣間みてはみたいものだという叫びに近い希いを表明したソネット第V集の延長なのだと力説した(G. 一一五)。「コオロギ」は作者が、自分の詩がコオロギの歌同様に持続するだらうという語るぎない信念を主張しているのだとゴールデンは述べた(G. 一一六)。

七 既刊ソネット五篇

「十一月」と「四月」は対のような二篇で冬へ向かう季節と春へ向かうそれとの対比で作者のそれまでの歩みを一瞬のうちに展望した趣きが窺える。

「ソネット」は、案内者としての星が主な関心事になつてゐる四八行の詩「靈感」「Inspiration」、二三行の詩「惑潮」「Infatuation」と共に、*Littell's Living Age* 誌の一八五一年五月二二日号に掲載されたものや、タッカーマンの作品として公刊されたものでは、二年前の同誌十月十九日号に載つた「五月の花々」「May flowers」以来の作品である。

これは、一八四八年六月二九日に生れたばかりで名も付けられないうちに亡くなつた娘の死を回想したものだろう。この詩の基礎は秋のケリーンフィールド一帯に吹き降つて作者の悲しみに適合する荒廃の場面を残す雨と風である。かつて春の花々が咲き乱れていた所に彼は「哀愁に満ちた秋と身悶えする木の葉」を見る。そして「濡れた黒い屋根屋根」を目にするとそこに焦点が合つて「日除けに数珠繋ぎに連なる雨滴」が見えるのだ（G・三四）。

「ソネット連作」

〔一〕(一) *bluet* 北米産アカネ科トキワナズナ属の植物の総称。
この連作の初出は、*The Atlantic Monthly* 誌の一八六二年六月号で、自然界と宇宙の諸々の姿、有り様を「神聖な造化の妙」と受け取つて〈真実〉を目指して探究する自分自身を再確認する作品である。

ギリシャ語、ラテン語関係その他で同僚の秋山学氏の教示を得た。深謝申し上げる。無論、誤りや不備は全て本稿筆者一人の責任である。

第二部

フレデリック・ゴダード・タッカーマン (Frederick Goddard Tuckerman, 1821-73) の世界

フレデリック・ゴダード・タッカーマンは一八二一年二月四日、マサチューセッツ州のボストンで生れた。奇

しくもというのも変かも知れないが、その一九日後の二月二三日には、ジョン・キーツが肺結核で二十五歳四ヶ月弱の若さでローマで客死した。因にこの年には、ボードレール、フロベール、ドストエフスキイが、その二年前の一八一九年にはメルヴィルとホイットマンが生れている。

タッカーマン家は一六四九年頃、イングランドから新大陸へ移住しており、ボストン発展の初期に遅く名家になつてゐる。タッカーマンの父エドワードは、その兄弟の牧師で博愛・慈善家であつたジョウゼフほど有名ではないものの、輸入卸売業者として成功した裕福な商人で、ボストンの有力な名士の一人として、この町が港町から文化大都市に変貌するのに貢献した。彼は商業・市民・文化・慈善への関心共々宗教面でも活躍して、マサチューセッツ監督派神学校の評議員にもなつた。二度目の妻との間に四人の子女を儲けて彼らに自由に各自に相応しい才能を開花させながら宗教教育も怠らなかつた。

長男エドワード（一八一七—一八六）は有名な植物学者（特に苔類の権威）になり、長年アマスト大学の教授を務めた。この家族はアマスト在住のエミリー・ディキンソンとは懇意にしてゐた。彼女は彼の死（一八八六年三月一五日）に際して、その未亡人に次のような慰めの手紙を送つた。エミリー自身の死（同年五月一五日）の丁度二カ月前のことである。「親愛なる人へ、『眼は見えず耳も聞こえませんでした』。何という報いでしょう！己が息子たちを受け入れる神の熱情ときたら！何たる法悦！何たる無限！祝福に満ちた声が語つています、いえ、まだ声にはならず幻です、『私はあなたを去らせはしません、私があなたを祝福しないなら』と、エミリー」[Thomas H. Johnson, ed., *The Letters of Emily Dickinson* (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1958) p.898. letter No.1035. 最初の引用は「コリント人への第一の手紙」二・九から。最後のは「創世記」三三・二六の「私を祝福して下さらないなら私はあなたを去らせません」の言い換え]

次男サミュエル・パークマンは、欧米で著名な音楽学者になつた。聖パオロ教会やニューヨークのトリニティ教会のオルガン奏者、合唱隊の指揮者を務め、讃美歌集二冊を出版し、聖堂音樂について盛んに講演した。
三男が我らの主人公である。彼は親戚のF（フレデリック）・W（ウイリアム）・ゴダードに因んで名付けられ

た。」の人物は、その前年の一八二〇年に、ワーズワースとスイスを旅行中に湖で舟が転覆する不慮の事故で溺死して、この詩人の哀歌「チューリッヒ湖で溺死したアメリカの青年 F. W. ゴダード氏に関する詩」*“Lines upon a Young American Mr. F. W. Goddard, who was drowned in the Lake of Zurich”*（六行十三連、計七八行の、ABCABCの型で押韻する詩）の主題となつた。

末子が妹のソフィア・メイで、ティヴィード・エックリー牧師（その父は「オールド・サウス教会」の牧師を三十二年間務めた名士）夫人になつた。文芸に深い関心のあった女性で、フローレンス在住のブラウニング夫妻と親交があつた。彼女とブラウニング夫人との間の現存する書翰集には、しかし兄フレデリックについての言及がない。

タッカーマンは、ボストンの富裕で有力な親類・友人に恵まれた名家の人々に伝統となつてゐる教育を受け、礼儀作法の正しさ、他人を敬うこと、欠点のない品行を、両親から植えつけられた。十二歳になるとヴァーモント州バーリントンにあるジョン・ヘンリー・ホブキンズ主教の私塾に送りこまれ、ボストンのラテン語学校に通い、十六歳でハーバード大学に入学する。そこで指導教師が、セイレム出身の神秘詩人ジョンズ・ヴェリー（Jones Very, 1813-80）であり、級友に、エミリー・ディキンソンが師と仰いで文通を続けた、そしてエミリーー死亡後彼女の詩集を編んだ牧師・文筆家のT. W. ヒギンソン（Thomas Wentworth Higginson, 1823-1911）がいた。

タッカーマンは眼を悪くして一旦中退するが、翌年同大学法科専門校（ロー・スクール）に復学して一八四二年に無事卒業、一八四四年にはサフォーク郡弁護士会に所属を認められ、一家の古くからの友人だったボストンのソヒヤー（Edward D. Sohier）の事務所で一年間働いたが、弁護士稼業は性に合わないと覺つてそこをやめる。以後は、天文学、植物の研究と詩作に専念する。高性能の天体望遠鏡を所持していて、天文学と気象学の記録を続けた（一八四七年一〇月～一八五〇年一二月末までの詳細な天体・気象の観測が残つてゐる）。生物学者としては、ハンコック郡とその近傍の植物相・動物相の権威として認められた。

一八四七年の二月に、後に南北戦争時に将軍になるグリーンフィールド（マサチューセッツ州西部の町）のデイヴィッド・S・ジョーンズ（David S. Jones）から三千ドルで家を購入してその地に移り、彼の娘ハンナ・ルシングダ（Hannah Lucinda Jones）と六月一七日に結婚、黒髪の穂やかなこの婦人はタッカーマンと琴瑟相和した。以後、彼は、一度の海外旅行以外は生涯この町に居住した。

一八五一年、好きな英國詩人何人かの所縁の地を訪う旅に出る。この巡礼の旅は、興味津々たるアルバム「一八五一年夏、スコットランドとイングランドで採集した野の花々」に押し花とその名、採集地と日付共々入念に記録された。例えば、トマス・グレイの墓地で引き抜いてきたシソ科の芳香性植物カキドオシ、スコットの小屋や墓地で採つたアオイやジャスミン、ワーズワースの小屋での紫パンジー、ストラットフォード・アポン・エイヴォンの教会境内で採集したアオイなど、あるいはケンブリッジのクライスト学寮を訪ねた時には「ミルトンの桑の木」から記念に小枝を折り取つてきた。

一八五四年の秋には、二度目の海外旅行に出かけ、翌年の一月末には、イングランド南岸沖のワイト島西岸にあつたアルフレッド・テニスン卿の家ファリンフォード（Farringford in Isle of Wight）の客となつて、三、四日間忘れ難い時を過ごした。テニスンは彼をすっかり気に入つて、自分には前例のないことだがと言いながら、自作の獨白形式の詩 *Locksley Hall* (1842) の原本手稿を彼に進呈してくれた（今はタッカーマンの孫娘を通じてイエール大学に寄贈されている）。以後、親しい文通が続いた。テニスンの励ましは、タッカーマンが詩作を続けるのに大いに役立つたであろう。

妻ハンナとの間には二男一女が恵まれるが（最初の男女の双生児のうちの女兒は生後すぐ死去する）、妻は三人目の子の出産五日後の一八五七年五月一二日に急死する。十年間の結婚生活であった。この突然の悲劇によるタッカーマンの傷心癒し難く、その後は、ただでさえ鬱屈氣味だった生活は度を増して、彼の生涯の孤独が始まつ。彼は妻の墓碑銘にエレミヤの嘆きからの一節を刻ませたが、「妻の死に自分の世界の崩壊をみた」タッカーマンの嘆きが、ソネット第II集の核心部であり、このソネット群は「アメリカ文学における最も鋭敏深遠な悲痛

の記念碑の一〇」(G・四一)になる。

彼の詩は、一八五〇年一〇月一九日号の *Littell's Living Age* 誌に「五月の花々」「May flowers」が初めて公表されたが、その後同誌の一八五二年五月二三日号に四七行の「靈感」「Inspiration」一二三行の「懲溺」「Infatuation」、「ソネット」「Sonnet」[本稿一〇]一一ページの作品の三篇が掲載され、一八五四年七月号の *Putnam's Monthly Magazine* 誌に一〇七行の「ピコメガン」「Picomegan」[グリーン川の意の先住民の名称]が載った。それから、カール大帝の最愛の娘と宫廷の側近の平民の青年との恋物語を描いた一六五行の長詩「ロトルダ」「Rhotruda」などを、ソネット第I集・第II集共々収録した『詩集』*Poems*を、タッカーマンは一八六〇年に私家版として出版する。彼はそれを、エマソン、ホーソーン、ジョーンズ・ウェリー、エラリー・チャニング、ジョージ・リブリー、ロングフェロー、ブライアント、そして勿論テニスンなど三十人の錚々たる文人に贈り、それぞれ返事が来た。ホーソーンには受け取つてもらえるかどうかを前以つて訊ねさえする慎重さであつたが、この大作家からの手紙(コンノロードから一八六年四月一四日付)は、さすがに並みのものではなかつた。

「詩集拜読、素晴らしいものと思います。: 収録されている詩が英米のいずれの国でも素早く広く公衆に受容されるかどうかは疑問だと思うが、それというのも、これらの詩の価値はその表面にはないので、信頼と同情の念で探し求められねばならず、紅玉の隠されている火を見つけ出すにはその中を覗きこまねばならないとの同じ類の洞察力がないと価値が見つからないからです。

再読すれば最初に読んだ時より多くのものを得られるし、考えながら熟読すればこの作品の多くはますます輝きを増すで」よう。「他所者」「The Stranger」[一六四行の詩]に大変感銘を受けた。「ピコメガン」と「マルジット」「Margites」「五行の詩」、それにソネットの全部にも。他の作品にも同じように親しみればやはり気に入つたかも知れません。あなたの場合の最大の困難は、とにかく読んでもらえることでしょう。一度読んでもらえば、この本は成功を收めるかも知れません!」

タッカーマンはホーソーンへの手紙で、自分は多くは望まない、理解してくれられる人々にだけ呼び掛けるの

だ、と書いたが、ホーソーンはタッカーマンの詩人としての真価を逸早く認めた唯一の重要な作家だったのである。彼の評言はタッカーマンへの賞讃であると同時に、ホーソーン自身の鋭敏な感受性、率直さ、明晰さを反映するものであり、タッカーマンの詩の運命について予言の調子も備えていた（G一・三八六）。

エマソンもその二週間余り前の三月二八日にコンコードから、懇切な賞讃の返事を出したが、彼の推輓によつて「ロトルダ」は *The Atlantic Monthly* 誌の一八六一年七月号に載つたのである。ロングフェローも五月五日付きで厚意の籠つた返事を書いており、ホーソーン同様、タッカーマンの作品の内面の価値と「外側の成功」とは別物だと述べた。

この『詩集』は、寄贈を受けた人々からは好意を寄せられたが、地元紙には戯画に近い残酷なもじり二篇が載り、タッカーマンはその切り抜きと共に、「もじられるのは優れたものの不運である、浅薄な凡庸を戯画しようとは誰も思わない、グレイの『哀歌』もしばしばもじられた」などと自ら慰めの言葉をノートに書き込んだ。この『詩集』は詩人の生前英國で一八六三年に、アメリカで一八六四年と六九年に印刷されたが、特別の反響もなまいままで終つた。しかしタッカーマンは一八六〇年以降、結局未刊のままになる三集のソネットを書き、若干の短詩や物語詩、南北戦争で戦死した親友のジョージ・D・ウェルズを悼む七六行の詩「G・D・W」、そして最後の作品の一篇「コオロギ」などを書いている。

一八六七年までにはグリーンフィールドを去る決心をしたタッカーマンに、それを知ったホーソーン夫人から、一八六七年八月二十五日には亡夫の思い出のある家「ウエイサイド」を借そうと、また、翌年四月五日には、亡夫の「友人」のタッカーマンになら売ると、手紙が来たが、結局その話は実現しなかつた。彼は自家を売却し、町なかのホテル住まいをする。

一八六九年には、長男が二十一歳で死去し、翌年には老母も亡くなつたが、このどちらの死もタッカーマンの詩には記録されていない。一八七三年五月九日に彼は永眠した。地元紙の *Greenfield Gazette* は、それを次のように報じた。

「フレデリック・G・タッカーマンは金曜日の夜、心臓病のため、寄宿先で死去した、享年五十二歳。ハーバードとロースクールの卒業生で法曹界に入つたが、その職を実践しなかつた。ボストンの商人として大成功を収めた父親の十分な遺産があつたので彼は我々の間で隠遁生活を送つた。優れた学者で何篇かの見事な詩を公刊した。彼の妻はグリーンフィールドの故デイヴィッド・S・ジョーンズの娘で何年も前に世を去つた」。

世人は既にとつくに彼を通り過ぎてしまつていたが、一瞬立ち止まり、彼が誰だったかと考えた。それはまるで、タッカーマン自身が「何年も前に」亡くなつていたみたいだつた、とは、モマディの言である（C P · x x ii）。

こうしてこの詩人は静かに忘れられてしまつた。

*

二十世紀になつて間もなく、ニューヨークのルイス・ハウ（Mr. Louis How）なる人物がアメリカ詩の選集を編もうとする。それは出版には到らなかつたのだが、その草稿中にタッカーマンのソネットが二篇入つていた。それが劇評家で隨想家のウォルター・プリチャード・イートンの注意を引いた。彼はこの作者に興味を抱き、その二篇の出所を探して、一八六九年に出た『詩集』を見つけた。イートンはその卓抜さを認めて、タッカーマンとその詩について一文を発表した（E）。一九〇九年のことと、この論文がタッカーマン浮上、再発見のきっかけとなる。それを知つたウイター・ビナーは、アマスト在住のタッカーマンの次男の夫人とその娘であるクラーク夫人（Mrs. Orton Loring Clark）と文通を開始し、この孫娘の所有していた遺稿のソネット三集を発見した。一九三一年にそれを既刊の二集に加えて第I～第V集のソネット集を世に出した（B）。初めてタッカーマンの優れた作品の全貌に近いものが明らかになつた。彼のソネットの熟識を促そとⅢ・八、Ⅳ・十の二篇を再録した好意の籠つた書評（B W）を初めとして、全体より部分の方が良いとはするもののタッカーマンの内的価値を認める批評（M T）、ソネットⅡ・十四、V・三を再録してタッカーマンを高く評価する熱烈な書評（W A）共々、タッカーマンの自然への感受性と編者ビナーを讀えるもの（N）、あまり評価しない（T）や（R）が、一九三

一年のうちに出了た。

一九三八年には、イーヴォ・ウインターズの激賞が現われ（WY）、ビナー版から「時代に先駆けて書かれている」として六篇のソネットを再録して、劣つた詩人たちが慣習で絹のように滑らかにしたものにタッカーマンは「飾らず素朴な粗々しい力を与えた」と評価する詩華集（B・P）が出る。一九四〇年には、「彼のソネットは見事な名匠ぶりを示しており確固としていて新鮮で明晰で：悲壯な感情を表現していく記憶されるに値する」とブルックスが評価し（BV）、一九四八年には彼のソネット六篇を選入する詩華集（U）が現われる。「コオロギ」が一九五〇年に陽の目を見、ウインターズ（WY）、マーカス（M）の評価が続き、一九六二年にはウイルソンがその大著で大いに脱線してタッカーマンに敬意を表し、「今日まだ知られていないのは大いに遺憾だ、彼の人生からの隠退が招いた無名からようやく浮上したのだ」と感動しながら述べ、タッカーマンの言葉を造り出す現代性に注目して「非常にジョイス流だ」とも評した（W・四九三）。そして、タッカーマンの詩の未刊作品も含めた彼の全貌を初めて公刊したモマデイ版『全詩集』（CP）の登場となり、ソネット群に好意を寄せて注意を呼びかける系統立った評釈（H）や、詩人の内面の資質を評価した短いが厚意ある論評（ER）に続いてゴールデンの評伝（G）が出現したのだが、その後が、実は静まり返っている感がして今日に到つてゐるのである。「以上の伝記上、批評史上の事実については、モマデイ（CP・XVii-XXii）、ゴールデン（G・一五一八）（G・三八一一九三）に依拠した。」

*

タッカーマンのソネット群は、個々に点検されると、小さな稀にみる美しさの一大貯蔵所の觀を呈するが、そういう吟味の仕方ではこの詩人の到達した価値を十分に正當に評価することにはならない、とゴールデンは言う（G・三九二）。タッカーマンがアメリカ文学で究極のところ如何なる位置を占めることになるかは、彼のソネットが一つの統合された連作として考察されるか否かにかかるつていてるに違ひないとも。ソネットの全シリーズはこの詩人の内部生命の生長と發展を有機的に描き出したもので、結局それは彼の自伝なのだ。この点が明らか

になるのは、多分、ビナーが光を当てようとして世に出した第Ⅳ～Ⅴ集を、タッカーマンが「個人のソネット」だと命名していることからであろう。二十年以上に亘って書かれたこの一大ソネット群は、タッカーマンが宇宙における自らの位置の挫折と「暗い疑い」から結局は和解と静穏に到つてゆく動きのくつきりとした一大模様であり、彼は遂には「彼が凝視している間に、殆どその心の中に理解できないほどの平和が入り込んでいったと言つてもいいのだから」(V・十五、二三一～四行)と告白できるようになるのだ(以上、G一・三九三)。

タッカーマンが、もし完全にアメリカ文学で浮上するとしたら、しかるべき理由でそうなるにこしたことはないが、それには特に二つの理由がある、とモマデイは述べた。(一)彼は十九世紀のアメリカ浪漫主義の主流とは歴史上反対の立場にある。この事実が百年近く無名のままだったことを説明するのと同じように、今や彼の名声「と いうほどにまではいかなかつたと本稿の筆者はみているが」の説明になる筈だ。タッカーマンの知性と文学上の孤立は、入念な探究に堪えるだろう、それ自体有効な文学を構成するのだから。(二)彼の詩はそれ自体で価値がある。それは、視野・展望が鋭くて判断の健全な人が所有するのに最も相応しいものなのだ(CP・XXVii)。「全詩集」の序論をモマデイがこう結んでから、しかし、四十年近く経つ。十九世紀ニューイングランドの詩人のうち、アメリカ文学史上最も知られることなく、最も無視されてきた詩人の一人で、生前その作品が事实上殆ど等閑視され、後の世代には完全に忘れ去られた(G一・三八)。タッカーマンは、炯眼の士の熱意で確かに復活したが、その作品は今日、どのくらい「所有」されているだろうか。

本稿で拙訳したタッカーマンの作品は、実は彼の全詩業の詩行総数の三二%ほどであるが、作品数から言えば総数一四九篇の七五%強になり、彼の最も本質に関わる部分であろう。自己点検・自己吟味を静かに厳しく統けるソネット群は、一旦は見失ったかにみえた希望を取り戻してゆく道程だと筆者は感取したが、その詳細は稿を改める。この把握が妥当か否かの点検材料を提示できればここでは一まず満足とした。ホーソーンが手紙で述べたように、タッカーマンの場合(に限らない筈だが)その作品そのものが読まれること、再読・三読されることが何よりも肝要だらうから。

なお、エミリー・ディキンソンは、四〇キロメートルしか離れていない所に住んでいたタッカーマンについては、何しろ先述のように彼の長兄の家族とは親しくしていたのだから、聞き知つてはいただらうし、彼の詩のことが彼女に一度も伝えられなかつたとも信じ難い。彼の『詩集』が彼女の注意を全く惹かなかつたということもなさそうに思われるが、「エミリーの残されている書翰には彼への言及は皆無である」飽くまでも推測の域を出ない。それゆえこの二人は「生存期間が四三年重なるのだが」見知らぬ者同士だったに違ひない（G・四七）。不思議な行き違い、出逢い損いとして、残念な気がしないでもない。

略年譜

- 孟
森 田
- 一八二一年 二月四日、フレデリック・ゴダード・タッカーマン、マサチューセッツ州ボストンで生れる。
- 一八三三年 ヴィアーモント州バーリントンの私学「ビショップ・ホブキンズ」校で大学入学準備をする。
- 一八三七年 ハーバード大学に入学。
- 一八三八年 同大学中退。眼の病気のせいと言われる。
- 一八三九年 ハーバード大学の法科専門校（ロー・スクール）に入学し直す。
- 一八四二年 同校卒業。父のエドワード死去。
- 一八四四年 マサチューセッツ州サフォーク郡の弁護士会に所属。
- 一八四七年 六月一七日、マサチューセッツ州グリーンフィールドのハンナ・ルシンド・ジョーンズと結婚。ボストンを去つてグリーンフィールドに引越す。
- 一八四八年 六月二九日、長男エドワード誕生（一一八六九年没）。二卵性双生児のもう一人の長女は名付けられないうちに死去。
- 一八五〇年 「リッテル・リヴィング・エイジ」誌十月一九日号に、詩「五月の花々」が初めて印刷される。
- 一八五一年 五月一七月に初めてスコットランド、イングランドなど海外旅行に出る。

一八五三年 三月二九日、次女ハンナ（本人はアンナと自らを呼んだ）誕生。

一八五四年 秋から翌年二月にかけて、二度目の海外旅行。アルフレッド・テニスン卿の客人となり、その後長く続く友情が始まる。

一八五七年 五月七日、次男フレデリック誕生（一一九二九年没）。その五日後の二二日、妻ハンナが産後の併発症で急死。

一八六〇年 『詩集』（ソネットの第Ⅰ、第Ⅱ集の他、物語詩などを収録）の私家版出版。

一八六三年 同詩集の英國版、ロンドンで刊行。

一八六四年 同詩集の最初のアメリカ版、ボストンで刊行。

一八六七年 二十年居住したグリーンフィールドを去る計画を立てる。ナサニエル・ホーリー夫人（ホーリーは三年前に死去）と、そのコンコードの邸宅「ウェイサイド」を購入する件で文通。

一八六九年 『詩集』のアメリカ版再版される。長男エドワード、二二歳で死去。

一八七〇年 タッカーマンの母死去。

一八七一年 コンコードへ引越すことを断念。

一八七三年 五月九日、グリーンフィールドで、五二歳三ヶ月になつたばかりのタッカーマン心臓病で死去。「フェデラル・ストリート墓地」に埋葬。ソネットⅡ・三十二の最初の二行が彼の墓石に刻まれた。

（ゴーレム「G・一五一四八」、モマティ「C.P.・XVII-XVIII」の記述を参照の上、前者の作製した年譜「G・一三」を筆者が若干補った。）

あとがき

どの分野にも、いつの時代のどこにでも、静かに慎しく沈んだままの優れた価値というものはあるものだ。それを見い出す炯眼の士が存在するのは誠に幸いだが、それが甚だ少ないのが残念である。一旦復活してからは正当な扱いを受け続けることになった、例えば、メルヴィル、ホイットマン、エミリー・ディキンソンは順当で結構だったが、この三人と同時代の同じくニューヨークランド出身の我らが主人公タッカーマンは、その死と共に熟睡すること三十余年、この「忘れられたアメリカ詩人」は二十世紀になってから一、二度振り起こされて身動きの気配はみせたものの、そのまま眠り込み、三十年代に入つてようやくウイター・ビナーによってソネットの全作が公刊され、イーヴォ・ワインターズの激賞もあって（これはしかし逆効果だったかも知れないのだが）目を醒ましたかにみえたが、またもどろどろと眠り続ける。

一九五〇年代になつてからこの「無視された詩人」に光を当てる試みは、サミュエル・ゴールデンによる遺稿詩五篇他の公刊と彼の伝記研究共々改めて開始され、六〇年代に入つて著名な批評家エドモンド・ウイルソンにも注目され、遂にタッカーマンのそれまで未刊のままだつた作品も含めたモマティ編『全詩集』（本稿が定本とした）が公刊されるに到つた。これでこの詩人のほぼ全貌が死後九十数年を経てようやく明るみに出たことになり、本稿が主に依拠したゴールデンの好著もポピュラーな作家叢書の一冊として引き続き刊行されて、これでタッカーマンは完全に眼醒めたと思われたのである。

ところが何故か、彼はまたぞろ眠り始めたようなのである。件の『全詩集』はじきに絶版になり、彼への言及さえ一向に活発になつた様子がない。大部の『コロンビア・合衆国文学史』（一九八八年）には唯の一度だけ、次の、「十九世紀が時々、ブライアント、ロングフェロー、ホイットティア、ホウムズ、そしてロウエルを惜しみなく過度に褒め讃えたのは、特にウォルト・ホイットマン、ジョーンズ・ヴェリー、及びフレデリック・ゴダード・タッカーマンを犠牲にしてそうしたのは、おそらく不幸なことだった」なる一文で、名前のみほつんと出さ

れたきりである、いに挙げられた他の作家・詩人には、犠牲にされたとある他の二人も含めて、それぞれ相当量の論述がなされているのに。同じく浩瀚な『コロンビア・アメリカ詩史』（一九九三年）に到つてはその名前すらいにも一度も現われない。ゴールデンは、タッカーマンの詩が「アメリカ文学史上永遠の地位を得るのに殆ど一世紀かかった」と概嘆したが、「永遠の地位」を得ても尚ほの有様である。その後もタッカーマンが復活した気配に筆者は寡聞にして氣付けないでいる。我が国的事情も同じである。

筆者は約三十年前、イエール大学に滞在中、ホーソーン夫人がその邸宅「ウェイサイド」をタッカーマンに売ろうかと申し出たことに関する手紙を読んでその名前を知り、更に同じ頃から親昵する」とになつたイーヴォ・ワインターズの〈評価批評〉によつて、この知られること余りに少ない詩人の真価が氣になり始め、氣になり続けてきた。そして、彼はいつまでもこれ程眠させておかれていよい詩人ではないし、その作品世界は沈んだままにしておくには余りに貴重な価値を秘めていると信ずるに到つた。いに、筆者自身のタッカーマン研究の出発点としても、彼の本領を示すソネットの全作品とその終章とも目される長詩一篇を拙訳して、主として先驅者ゴールデンの援けを借りながらその世界を垣間みる」とにした所以である。これによつて本邦でも、いの詩人に光が当るいにになれば幸いである。今年は、タッカーマン没後一二〇年に当る。

* Emory Elliott, ed., *Columbia Literary History of the United States*. New York: Columbia University Press, 1988, p. 288.

** Jay Parini, ed., *The Columbia History of American Poetry*. New York: Columbia University Press, 1993.

*** 本稿「誤注・註解」の項の参照文献（G・一八）。

**** 同（C・一一四—一五）。

本稿は、四半世紀余在職する」とになつた筑波大学での私の最終講義の資料になる予定である。
本稿を、この文芸・言語学系に在職された、及び、やれでいる全ての方々に、感謝の心をこめて捧げる。